総合討論

司会・家島彦一

ヨーロッパの形成

司会・家島　以上３つの報告を受けて、総合討論の柱を私なりに４点にまとめてみた。（1）ヨーロッパとはなにか？（2）ヨーロッパと地中海世界、（3）海洋史観をめぐって、（4）展開しつつある東南アジアの未来像および他世界との関り、である。この４点を軸に総合討論の方向を考えてみたい。まず、ヨーロッパ的なものはとは何か、という点である。川勝さんは最初に、梅棹さんと高谷さんの文明モデル論、モデル図をあげて、相似点と相違点を指摘して、そこから議論を出発された。一般にモデル論というのは、ひとつの面の中に、時間と空間を同時に閉じこめるわけで、当然そこでは時間性と関係性という二つの問題が難点、欠点として生じてくる。そのあたりから川勝さんが議論を展開され、３つの点を指摘された。その第一は、川勝さんは特に生態学的な観点を意識されて、土地に住む人間と社会の問題を提起された。その第二は、人間の生活、川勝さんのタームでは物産複合に関連する問題である。人間の営み、生活、流通の問題も含まれている。第三は、歴史展開と東南アジアへのアプローチの問題を述べられた。

最初の論点で、ヨーロッパが外に出ていく姿勢、つまり近代国家の形成に至る歴史展開に大きく関わっている「ヨーロッパ的なもの」についての問いかけを行った。ヨーロッパは土地所有指向型の極めて強い社会であった。それが人間の営み、生活、文化、生産、流通にも影響し、歴史展開の一つのパターンとなって、世界に広がっていったという点を強調された。そこで、ヨーロッパが土地所有指向型であるならば、一方の東南アジアはどうなのか？ということでの議論を出していただきたい。

第二の論点で、ヨーロッパと外との関り合い。これには、地域単位を見る指標として物産複合という問題を提示された。この点も議論の対象にしていただきたい。物産複合は地域の中でまとまっている場合はいいのだが、それが変質・変容する場合には、地域間、つまり外との関り合いにおいて展開していく。そこで東南アジアとヨーロッパとの関係が論点になってくる。ヨーロッパ人、ヨーロッパ社会というのは、外との関り合いの中で自ら意識され、作り出されて行った。外圧の中で

形成・展開していったと考えられる。つまり、ヨーロッパの特質は外の世界との関り合いの中で変容していくという面を見て行かなければならない。ヨーロッパは最初にイスラム社会と出会い、文化的な劣等意識を持ち、その中で、ヨーロッパというものが意識されていく。さらには、いわゆる「地理上の発見」の中で、彼らはインド洋世界を見て、ヨーロッパそのものを考え、そしてヨーロッパ独自の世界戦略を考えた。ヨーロッパが東南アジアに出ていった当時、アントニー・リードのいう、いわゆる「交易の時代(the age of commerce)」であった。ヨーロッパ人はこの時のアジア交易の情況を見て、これをひとつのモデルとして、彼らの世界戦略の中に組み込んで行った。それから、アメリカ大陸についても同様である。こうしてヨーロッパの世界戦略が作り出されていった。そして、ヨーロッパにないもの、今までにないものを見つけだし、それを武器としてヨーロッパというものは変化してきた。その際、川勝さんは海洋史観というものを強調されている。この点も十分に議論していただけたらと思う。

東南アジアというのは、自然生態系が極めて豊かで、多様な世界である。豊かさと多様性があるからこそ、いろいろな問題、悲劇を生んだとも捉えられよう。つまり、東南アジアの自然の富を求めて、外からの様々な人間が集まってきた。一方、東南アジアは大きな包容力を持ち、自然生態系の豊かさを持つことで、外の人間を受け入れてきた。逆から言えば、東南アジアは他から搾取される場となった。様々な戦略が渦巻き、人、情報、ものが集まる場となった。そして、東南アジア自体が、これまた変化、変容していく交じり合いの中から、新しい模索が出てきた。これを未来像というものとつなげて、川勝さんは語られたと思う。それを太平洋文明という形で提示されたが、東南アジアがその中でどう展開していくか？東南アジアを考えていく一つの議論となるだろう。文明移転論というのがある。タイムスパンをどのくらいに設定するか？という問題があるが、古代文明の中心である中東から、地中海世界、大西洋、アメリカ、極東、そして次の新しい文明発信地、人間のあり方を考える場として太平洋文明というものが、非常に重要になってくる。こうした川勝さんの考え方は大きな議論のテーマとなるだろう。

また、陣内さんの報告では、ヨーロッパと地中海世界、地中海世界と東南アジアという比較の問題が提示された。陣内さんは建築史が御専門であるが、都市構造、都市空間の持つ特質を分析されて、その中に地中海世界の共通性あるいは性格を抽出された。そこにはイスラム的なものが、非常に強くかぶってお

り、同時に北地中海では南地中海と違い、ヨーロッパ的なものが強くかぶっている。詰まり、複合的に地中海が成り立っているわけだ。この点に関して、高谷さんは最初の話しのところで、地中海はヨーロッパとは違うと明解におっしゃった。この点についてもう一度、高谷さんから御意見を伺えたらと思う。ともかくも、地中海とヨーロッパをどうつなげていくかという点は重要な議論の柱となろう。他方、陣内さんも指摘されていたが、地中海と東南アジアとを比較した場合にどうなるか？という点も興味深い問いである。両者の共通性としては、民族、文化、社会が複合・多様で、交通の要路でもある点である。海の世界、海域世界としての共通性である。つまり、両世界に共通して海と島が人をつなぎ、もの、情報を結び付け交流し、新しいものを生んでいくという面で非常に重要な役割を果たしている。他方、両者の違いとしては、建築や都市のあり方と関わっているのだが、地中海を石の世界とすると、東南アジアは森の世界ということになるだろうか。坪内さんが東南アジアには果たして都市があるだろうかという問いかけをされた。すると、比較の対象の都市自体が、危うくなってくる。このあたりの議論はもう少し続けてもよいのではないか。

高谷　補足は特にないが、私は、ヨーロッパと地中海は別、東南アジアはこうだと申し上げた。角山先生はそこの所をもう少し確認してから議論した方がよいとおっしゃった。それで、ヨーロッパというとき地中海を含めて議論するのかどうか、そこらから考えてみたらどうだろうか。

司会・家島　ヨーロッパと地中海の両者を一体として捉えるというのは、川勝さんどうだろうか。

川勝　角山・高谷論争は、歴史・時間軸における世界理解と生態学的理解との対立点がはっきり出ていると思う。最終的には、弁証法的に統一されればよい。私は自分の専門の立場から角山さんの意見に与する。ただし、前提として生態学的理解を抜きにして歴史論は、人間中心主義になってしまって、地球を忘れた理解になる。にもかかわらず、歴史的な展開は紛れもない事実である。高谷さんはギリシャ、ローマ、ヴェネチアをあげているが、ギリシャは紀元前６世紀、ローマは紀元前３世紀頃から西ローマ帝国解体の紀元後４世紀、ヴェネチアは１２・１３世紀から１５・１６世紀までをイメージされている。時間的に全く違う。フランスの小中華というのは今でもそうであろうが、やはりフランスのブルボン王朝がその典型であろう。領邦国家というのは１７・１８世紀のドイツが分かれていた時代である。イギリスは１８・１９世紀をイメ

ージされている。時代の選択が恣意的に感じられる。歴史家から見ると、ヨーロッパはこうだ、地中海はこうだとはなかなか言い切れない。ヨーロッパがアメリカに移民をした点であるが、移民した先には先住民インディアンがいた。最北にはエスキモーがいたし、熱帯地域にも先住民がいた。それぞれ生活形態があった。これが生態だ、といわれると一面そうだと思うが、現在一部を残していなくなっている。ヨーロッパ的生活類型が持ってこられて、北アメリカはアングロサクソン的、南アメリカはラテン・ヨーロッパ的な生活類型が支配的である。これを生態からはどう説明するのか。例えば、アメリカ東海岸は照葉樹林的なものが残っている。照葉樹林的生き方が根本だから、納豆を食わんといかん、といってもやはり食べない。生態から理解するということを、いかに歴史的事実が裏切っているかということは、高谷さんにも是非理解いただきたい。

角山　高谷さんの御報告、家島さんの整理もヨーロッパと東南アジア、あるいは地中海も含めて比較という形で提示された。しかし、抜け落ちているのは交流という視点である。司会の家島さんが整理の最後に書かれた他世界との関りというのは、一番最初にこないといけない。近代もこの交流から始まる。単なる交流ではなく、征服という形で東南アジアは支配されていった。こうして東南アジアが形成されていく、その過程が重要ではないか。これまで経済史でも比較経済史といって、明治維新とイギリスのテュダー王朝とかの比較などやってきたが、これはあまり意味がないのではないか、と今では考えられている。それで方法論も関係の中の比較というふうに変わってきている。東南アジアは、ぐじゃぐじゃという停滞的な状況というのが現実の姿として、ついこの間までこの特色をなしていた。高谷さんがフィールドワークでこの辺を歩かれた印象はまさにそうだった。ところが、今は変わってきた。変わってきたけれども本質は変わらないとおっしゃる。高谷さんがおっしゃるぐじゃぐじゃ、つまり融通無碍のネットワーキングという東南アジア像というのは、いつ、どういう形で形成されたのだろうか？１６世紀をとってみると、こんな状態ではなかったのではないか。中国も含めた永久停滞社会、あるいは古代専制政治によっていつまでも変化しないというイメージがいつできたのか、というと１９世紀のヨーロッパ人が作り出した歴史像だと思う。そういう歴史像が今問われているわけであって、本来東南アジアというのは非常に活気を帯びた時代をへており、１５~１７世紀初めにかけて世界の文明の中心として活況を呈したアジア像が、ヨーロッパの歴史家にネグレクトされてしまっ

ていた。こうした像は明治維新後日本にも入り、我々のアジア像を作ってきた。しかし、アジアは活気があって、そこに１５~１６世紀頃から本格的に世界中の資本、あるいは商人が全部集まってきた。そこでヨーロッパとの交流が大きく展開しはじめた。その後、川勝理論にあるように、逆にヨーロッパというものが形成されていったわけである。地中海とヨーロッパも同じことで、ヨーロッパというのは初めからあったのではなくて、地中海の文明が作り出したのがヨーロッパの文明であろう。その地中海の文明というのはアジアとの交流、特にイスラムとの交流から影響を受けていた。そういう歴史の過程の中で、ヨーロッパを産み出すという役割を地中海が果たしたのだ。これが一つのヨーロッパ誕生の物語だと思う。それゆえ、３つを比較するというのではなくて、関係の中で比較するという視点が必要だ。ただし、２１世紀どうなるかというのは、これまた大きな問題であるが、これも含めてアジア像を考え直す必要があるように思う。

司会・家島　高谷班では、東南アジアを特徴づけるものはなにかについて他との比較の中で、その違いなり共通性を見出そうということで、今までに中国、インド、アフリカ、中東、のそれぞれの地域間比較が行なわれてきた。つまり、比較ということに力点が置かれている。さきほども申したが、川勝さんの議論でおもしろかったのは、まさにその交流、関係性の中でヨーロッパ自身が作られ、変容していくという点であり、私自身の研究の立場でも、交流、地域間の関りに、歴史のダイナミズムを見出すこと、それが歴史のおもしろさであると捉えている。

渡辺　高谷さんの非常に率直なお話を伺って、東南アジアを専門にしている方がヨーロッパをどういう目で見ておられるかが良くわかった。そのヨーロッパ像なるものが、ヨーロッパ人が自己正当化のために作った一種のヨーロッパイデオロギーなのだと角山さんが端的に指摘された。私もそのとおりだと思う。角山・川勝理論を結果的には補強する材料になるかと思うが、ここで「植民地物産」に関する資料をお示ししたい。ちょうど川勝さんとは別の立場で、しかし同じ時期に、物産、商品に関心を持っていた。表１がその資料である。これは京大経済学部の『経済論叢』で発表したものであるが、「植民地物産」という概念がドイツでどういう形で、産み出され、定着し、消えていったのかを調べたものである。この「植民地物産」という言葉はドイツでは今や死語である。この表はヨハン・ベックマンという１８世紀の博物学者の研究に基づくもので、彼はテヒノロギー（技術学）という言葉を作り出し、かつ商品学の創始者で

表1　「植民地物産」一覧：ヨハン・ベックマン『商品学序論』(1793-1800)より

	項目		頁	類別	主産地	用途	取扱業者等	備考
1	綿	Baumwolle	1— 67	製	アジア，アフリカ，アメリカ，ヨーロッパ	繊維		
2	鼈甲	Schildkrötenschale, (Schildpat)	68— 82	動	太平洋，大西洋，カリブ海	細工材		
3	藤杖	Handstöcke	83—103	製	東アジア	器具（材）		
4	醤油	Soya	104—109	製	日本，中国	調味料		
5	風鳥草	Kappern	110—121	植	アジア，南ヨーロッパ	調味料		
6	黄木	Gelbholz	122—127	植	南アメリカ，西インド諸島	染料（黄・羊毛）		*Technologie*
7	墨	Tusch	128—137	製	東アジア	顔料		
8	コロキント	Coloquinthen	138—144	植	レバント	薬種，媒染剤（黒・絹）	Apotheker, Materialist	*Technologie*
9	アラビアゴム	Gummi, Arabisches und Senegalsches	145—180	植	アフリカ，アラビア，西インド諸島	薬種，媒染剤（絹），糊，艶出料	Apotheke, Materialist	*Technologie*
10	ナポリ黄	Neapelgelb	181—192	鉱	イタリア	顔料（黄）	Apotheke, Materialist	
11	鮫皮	Fischhaut	193—204	動	大洋，地中海	研摩材		
12	オルレアン	Orlean, Ruku	205—223	植	中・南アメリカ，西インド諸島，フィリピン	染料（赤紫・絹，食用）	Apotheker, Materialist	*Technologie*
13	生薑	Ingber	224—241	植	アフリカ，東インド，ジャマイカ	香味料		
14	麝香	Moschus, Bisam	242—267	動	東アジア	香料，薬種	Apotheker, Materialist	
15	毛綿鴨の綿毛	Betfedern, Eiderdaunen	268—291	動	ドイツ，北ヨーロッパ，グリーンランド	寝具料		
16	鬱金	Curcuma	291—298	植	東南アジア，西インド諸島	染料（黄），薬種		*Technologie*
17	象牙	Elfenbein	299—349	動	南アジア，アフリカ	細工材，顔料（黒）	Materialist Apotheker(waaren)	
18	宝貝	Kauris	350—362	動	東南アジア，トルコ，アフリカ，アラビア，	奴隷貿易見返品	Naturalienhändler	
19	没食子	Galläpfel, Knoppern	363—384	植	ドイツ，ヨーロッパ，レバント	染料（黒），鞣皮料	Arzneywaaren, Materialist	*Technologie*
20	ディビディビ	Dividivi	385—391	植	中・南アメリカ，西インド諸島	染料（黒・赤），鞣皮料		
21	甘草	Süßholz	392—410	植	ドイツ，ヨーロッパ	薬種，調味料，器具材	Apotheker(waaren) Materialist	
22	ココ椰子	Kokosnüße	411—434	植	南ヨーロッパ，熱帯	器具材，食料，油脂		
23	駝鳥羽	Strausfedern	435—451	動	アフリカ	装飾料		

	項目		頁	類別	主産地	用途	取扱業者等	備考
24	鷺羽	Raigerfedern	453—465	動	ドイツ，ヨーロッパ，レバント，アジア	装飾料		
25	アンゴラ山羊毛	Kamelhaar	466—526	動	レバント，ペルシャ	製帽料		駱駝毛，羊毛も含む総称，大部分は山羊毛
26	甘橘類	Citronen, Orangen, Pomeranzen, Apfelsina,	527—572	植	南ヨーロッパ，レバント，ペルシャ	食料，染料（赤・絹），香料	Apotheke(r), Arzneywaaren	*Technologie*
27	乳香	Limonien, Mastix	573—591	植	南ヨーロッパ，レバント，ペルシャ	薬種，塗料，香油	Apotheker(waaren) Materialist	
28	サゴ椰子	Sagu, Sago, Sego	1—21	植	東南アジア，北米	食料		
29	海綿	Schwamm	22—39	動	地中海，アフリカ，紅海	器具料	Materialist, Apotheker, Specereywaaren	
30	軽石	Bimstein	40—53	鉱	イタリア，アイスランド	研摩材		
31	松露	Trüffeln	54—80	植	ドイツ，ヨーロッパ，アフリカ，アジア	食料		
32	牡蛎	Austern	81—111	動	地中海，北海，バルト海	食料		
33	白檀	Sandelholz	112—142	植	インド，中国，マダガスカル，アフリカ	香料，染料(赤)，器具材		*Technologie*
34	蘇芳	Sapanholz	143—155	植	東南アジア	染料（赤・黄）		
35	木藍	Indig	157—192	植	ヨーロッパ，アフリカ，アジア，中・南アメリカ	染料（青）		*Technologie, Erfindungen*
36	真珠貝	Perlenmutter	193—227	動	東アジア，ペルシャ湾，アメリカ，西インド諸島	器具材	Apotheker(waaren)	
37	車前草	Flöhsamen, Semen pfyllii	228—232	植	ドイツ，ヨーロッパ	染料，仕上料	Apotheker, Materialist	
38	雲母	Marienglas	233—250	鉱	シベリア，ペルー	透明材		
39	黒貂	Zobel	251—273	動	シベリア	毛皮		
40	おこじょ	Hermelin	274—280	動	北ヨーロッパ，シベリア	毛皮		
41	紅花	Saflor	281—300	植	中国，インド，東南アジア，レバント	染料（赤・絹），油料	Apothekerwaaren	
42	ツィベート	Zibet	301—308	動	中国，インド，レバント，アフリカ，アメリカ	香料	Apotheker	

注(1) 通し番号はベックマン自身による。 (2) 空行は巻・冊の別を示す。
(3) 類別欄の製は製造品，動は動物性，植は植物性，鉱は鉱物性の略。「綿」には綿花，綿糸，綿布が含まれるが，便宜的に綿布で類別を行った。「藤」には製造品としての藤杖と，藤細工原料とが含まれるが，前者によって類別を行った。
(4) 主産地はベックマンの挙げているものを記入した。西インド諸島の島名が列挙されているような場合には，西インド諸島と一括表示した。
(5) 取扱業者等欄には，記述の中で *Apotheke(r)*, *Materialist* 等に言及されている場合に，それを示した。したがって，当該項目以外は *Aw.* や *Mw.* ではないということにはならない。たとえば，34. 蘇芳，35. 木藍等は明らかに *M w.* である。
(6) 備考欄の *Technologie* は，『技術学入門』の *Wollenfärberey* の章中で，もっともよく使われる *Materialien* として挙げられ，『序論』参照の指示があることを示す。
(7) 同上欄の *Erfindungen* は，同一項目が『論集』にも収録されていることを示す。

(出典) 渡辺尚「いわゆる「植民地物産」について」『経済論叢（京都大学）』第133巻第1・2号1984年 P.3-7

あるということで知られている。商品学は何よりも商品の分類から始まる。私の考えでは、経済学の一つの起点が商品学である。下からの経済学の。１８世紀末のちょうどイギリス産業革命が進行していた時期に、実は私の見るところドイツもすでに進行中だったのだが、この時期に彼は『商品学序論』を執筆した。そこであげられている品目を私なりに整理したのがこの表である。ここには４２の商品が掲げられている。ただし、この数はベックマン自身が調べやすいものから列挙した結果で、４２という数に積極的な意味は少ない。しかしながら、この分類自体はリンネの影響を非常に強く受けており、生物学の分類を商品分類に適用しようとしたのである。生物学の影響が経済学にも及んでいるひとつの事例といえよう。４２の中で圧倒的な部分は非ヨーロッパ物産であり、４２の内１６が染料もしくは顔料だった。これらは植物性のものがほとんどである。産業革命前夜のこの時期、ヨーロッパ人の関心が向かったその一つは綿や染料で、これらは非ヨーロッパ物産であり、これらに対し強い関心が向けられていた。リンネの時代、特に植物に関心が寄せられたというのはこれと無関係ではないだろう。非ヨーロッパ物産、特に綿、それから染料を如何にしてヨーロッパに持ち込んでくるか、ということが、いわば生物学発展の起点になっただろうと考えている。産業革命期をへて生産力が逆転し、１８世紀には到底インドにはかなわなかった精巧な綿製品を、イギリスがインドに輸出するようになった。私に言わせれば、１６~１８世紀ぐらいの間はいわゆる中世的な商品体系、川勝さんの言葉で言えば物産複合がヨーロッパで大きく変わっていった時代である。その起点は「舶来品」である。ヨーロッパの中でできたものではない。オスマントルコ以東の、そういう意味ではトルコ産品という一般名詞があるが、そう言うオリエントからの様々な舶来品をヨーロッパ中世の財の体系の中に入れていくことによって、近代ヨーロッパ的な財の体系ができて行った。これが、マルクスのいう本源的蓄積のひとつの側面、マルクス経済学者が完全に見落としていた財の体系の組み替えの側面、すなわち商品史的側面として捉えられると私は考えている。それから、ヨーロッパ文化というのは非ヨーロッパ物産を取り込んでできたもの、それゆえ、ヨーロッパに本来的なものでないにもかかわらず、これがいかにヨーロッパの中から自生的に出てきたかというヨーロッパ・イデオロギーを創り出す過程が、１９世紀であったといえる。例えば、ゾンバルトなどを見てみると、当時のヨーロッパ文化の担い手になるような財の体系はヨーロッパの中世に生まれたと主張しようとしている。ところが、

コーヒー、紅茶、砂糖、陶磁器あるいは綿にしても、また醤油の紛い物としてのウスターソースや墨汁の紛い物としてのインクなどにしても、近現代の生活を彩る文化的なものの原産地はほとんどがヨーロッパの外から来たにもかかわらず、あたかもヨーロッパの内部から産み出されたのだというヨーロッパの内発的発展史観が全面的に打ち出されたのが、１９世紀であった。ヨーロッパイデオロギーのマニュピュレーションが世界的に行われたのが１９世紀であった。マルクスもこれに一役買っている。残念ながら、日本のマルクス経済学者はこのことにあまりにも鈍感であった。そう言わざるをえない。この表は川勝さんの主張を多少私の立場から補強する資料になるのではないかと思う。

それではヨーロッパというのは何か？線引きはそもそも難しい。制度的にいうと、ヨーロッパというのは南アメリカの一部もヨーロッパである。フランスの海外領土も EEC の一部だからだ。それから、ジブラルタル海峡をはさんだアフリカ側のスペインの領土、飛び地もそうである。ヨーロッパとは何かというと、いろいろな基準があり、時代的にも違いがある。例えば、レパントにしても、イギリス人に言わせるとジブラルタルから東であり、ドイツ人に言わせるとイタリアから東である。つまり、遠近法をそれぞれ持っている。さらに、キリスト教世界とイスラーム世界はきれいに分けることはできない。いわゆる「本来のヨーロッパ」というのは、イスラームから、あるいはイスラームを通してより東の地域から様々な文化を入れて現代のヨーロッパになったものを言う。イスラーム世界とキリスト教世界をつなぐいわば媒介項であり両者が部分的に重なっているのが地中海世界であろう。地中海世界はヨーロッパとも言えるし、ある意味ではイスラームとも言える。どこからがヨーロッパでどこからがそうでないかという線引きはあまり生産的ではない。むしろ、我々にとって問題なのはアメリカをどう理解するか？である。さきほど川勝さんも指摘されたが、これまでの生態史観の中にはアメリカの位置付けが欠けている。我々は欧米、西欧のようにアメリカをヨーロッパと一緒に考えがちである。明治維新以来の追いつけ、追い越せイデオロギーが今なお我々を呪縛している。ヨーロッパとアメリカを峻別しなければならない。そういう意味で、１９世紀以降最も発展した経済の３つの極として、日本、北米、西欧を考えた時、其々の類型というものをどういうふうに捉えることができるかということを、一覧表にしてみたのが、お配りした資料の表２・日本、北米、西欧の類型特性である。西欧を私はイタリアの北部以北と考えている。イタリア南部は本来の西

表２　日本・北米・西欧の類型特性

			日　本	北　米	西　欧
理論的規定	資本循環形態		生産資本循環	貨幣資本循環	商品資本循環
	危機形態		生産要素の不適合	投資先の不確定性	市場飽和
	基本関心		どのようにして作るか	何を作るか	どのようにして売るか
	再生産の必然性		有り	無し	有り
	同一商品再生産の必然性		無し	無し	有り
	利潤関心		弱い	強い	中位
	基本規定		生産の優位	投資の優位	販売の優位
	経済人（homo oeconomicus）類型		工場人（homo fabricator）	投機人（homo speculator）	市場人（homo mercator）
歴史的規定	労働形態		協業	独業	独業
	需要構造		流動的	流動的	固定的
	消費様式		可変的（他律的）	可変的（自律的）	不変的
	輸出依存度		低い	低い	高い
	資本関係		協調的	敵対的	協調的
	体制特性		開放系	閉鎖系	開放系
	経済空間原像		工場	農場	市場
	外界観念		資源供給源	未開拓地	販路
	時間観念		不連続	不連続	連続
	社会問題発生要因		世代差	人種差	階級差
	操作された帰属意識		国民	人民	市民
	資本・公権力関係		密着的	対抗的	親和的
	公権力発現形態		行政の優位	司法の優位	立法の優位
	経済政策目標	対企業	産業編成指揮	独占規制	市場基盤拡充
		対家族	消費過程誘導	消費者保障	共同体秩序
	政策理念		環境適応	安全保障	文化優位

（出典）渡辺尚「資本循環と資本類型」『経済論叢（京都大学）』第１５７巻第１号１９９６年　P.27

欧に入らないとしている。ギリシャも大変難しい地域で、ヨーロッパとも非ヨーロッパともいえるし、いわばちょうど交流のフロンティアにある地域であろうという風に考えている。

固有性と関連性

高谷　川勝さんからダイナマイトを仕掛けられて、バーンとやられたし、角山先生からも同じようにやられました。最初から、実は地域研究が問題にしなければならない最終の問題が出てきたという感じである。幾つか問題があるが、とりわけ重要な問題というのは、地域研究においては関連性なのか固有性なのか、ということである。角山先生も川勝さんも世の中は孤立しているのではなくて、関連の中でできていくとおっしゃる。静止的な生態ではなく動きまわる人間が大事で、その人間の作った文化が大事だとおっしゃる。例えば、アルゼンチンはドイツだよとか。そういうふうには表現されなかったが、要はそういうことを言われた。関連というのは無視し得ないものであることは私も充分認める。他方、生態ということに目をつけて見ると、たとえばユーラシア大陸の北には針葉樹が生えている。そのちょっと南は砂漠である。もっと南にいくと熱帯多雨林がある。これがユーラシアの生態である。そんな生態は今や効いていない、と言われる。それはそのとおりである。だが、地域研究の本当の重要な分かれは実は、ここの所にかかっている。静止的と言われる生態から考えていくか、人間の作り出した文化や関連というところから考え出していくか、という視角の違いである。この問題はちょっとおおげさに言えば、結局は世界の未来を論ずる時の姿勢の違いにもなると思うので、私はこの問題にこだわりたいのである。だがら、私は、爆破されかけているが、もう一度頑張ってみたい。今、渡辺さんがヨーロッパの考え方を述べられて、あのマルクスさえもが罪悪を犯した、いわんや日本のマルキストなんて全然だめだと言われた。そのひそみに習えば、あの川勝さえが、あの角山さえもが、マルクスの次に同じ誤りを犯していると私はそう思うのである。これはよく考えていただきたい点である。地域研究というのは、もし東南アジアを対象にしようとするのなら東南アジアから見なければならない。東南アジアの真価というのは、私がぐじゃぐじゃなどと言ったので、後進的だと捉えられたかも知れないが、そういうものではない。それから、私はギリシャ、ローマ、ヴェネチアそれからパッと近代国民国家を語ったので、まるで歴史を無視したかのように言われたが、そうではない。歴史を無視しているのではない。無視しているかのごとく見えるかもしれないが、

それはこれだけの長い歴史的時間のなかでも、その対極に東南アジアをおいてみると、その本質は不変といってよいほど、変化が少ないとみたからである。別の言い方をすれば、ヨーロッパに比べるとそれほど東南アジアというのは違うということである。その違いを知ることが大切なのである。東南アジアはぐじゃぐじゃであり、それが本当は意味があるんだぞということおわかりいただきたい。その内容を我々もまだうまく説明しきれていないが、我々の狙いはそのあたりにあることを御了解いただきたい。

坪内　高谷さんと必ずしも同じではないが、東南アジアの側から発言させていただきたい。御指摘いただいた中で、形成の中で物を見なければならないという点は実に大事だと考える。ヨーロッパの形成で東南アジアを取り上げていただいて、川勝さんの議論のようにまとめていただいた。角山先生や渡辺さんの議論は、ヨーロッパの形成における東南アジアというのではなく、やはりヨーロッパの形成であるようだ。つまり、渡辺さんがお示しになった物産は良く集まっていると思うが、この中に東南アジアの重要な物産は、極めてわずかである。しかもある種の時代のもので、ここで取り上げられたのはヨーロッパの形成でアジア全体、植民地がいかなる役割を果たしたかという議論のためには役立ちそうである。東南アジアというわけではなく、アジア全体、関係する諸外国というのが重要であって、その関係の中においてヨーロッパが形作られたと考えられる。翻って東南アジアは何だ、ということになると、川勝さんの議論では東南アジアの重要性、あるいはヨーロッパとの関係の重要性は指摘された。しかし、東南アジアの固有性を考える時、東南アジア自身の形成を考える時、ヨーロッパの役割は決して無視できないし、極めて大きな役割を果たしている。ただし、それは一局面でしかない。その形成には、インド、中国の役割をもっと大きく見なければならないと考える。形成を考える時、どこまで、二つの対立、あるいは関係をみるべきか？今回のヨーロッパと東南アジアという二つの地域がどこまでお互いにどう影響しあうか、という点を考えると、東南アジアにとってはヨーロッパを考慮にいれる要素が大いにあると思うが、ヨーロッパにとってほんとに東南アジアを抜き出しうる要素として、どこまで考えられるのか？ヨーロッパにとってはインドも中国も東南アジアも所詮は同じ機能しか果たしていないのではないかと考えると、その次どう整理したらよいのか？

木村　三人の先生方の御専門が経済学であるというのが非常にひっかかる。つまり経済とくに、近代経済というのは発展していくも

のとして捉えられている。私のように政治の制度、あるいは政治学をやっているとどうしても違うところを見る。そうするとヨーロッパというものの固有性、あるいは東南アジアの固有性、インドの固有性、中国の固有性、日本の固有性が、よりはっきり見えてくる。その意味で高谷さんの立場に立つ。少し違うけれども。例えば、ヨーロッパについてみれば、議会制といったものが専売特許であるが、これの基礎は一体どこにあるか？これについてはいろいろ法制史の研究があるが、古ゲルマンの集会までたどっていくとよくわかる。大陸国家と海洋国家との話をすれば、大陸国家というのは絶対主義で軍国主義で、官僚制を発達させた。しかもそういう国家的体質が現代の国家に非常強い影響を与えている。大陸型国家はコーポラティズム的要素が強く、現代でも諸活動が国家に収斂していく。それに対してイギリスは海洋国家で軍国主義も絶対主義も未発達で、したがって官僚制も自ずから脆弱である。逆にいえば、現代イギリスの悲劇というのはそういうその大陸型の強烈な伝統、官僚制の伝統がなく、官僚に専門的知識が欠如しているにもかかわらず、国家が経済に介入していったというところにもあるのではないだろうか。いずれにせよ、制度といったものはそうなかなか変わらずに、新しい制度がでてきても今ある制度の中に住む人間が新しい制度を自分の身丈にあうような形で制度を作りかえていく。そういうふうに見てみると、関係といったものがもちろんあることは認めつつも、その関係がそのままストレートに、アジアのものがヨーロッパに来てヨーロッパが豊かになって古きものと違う新しい近代的なものができる、という捉え方が正当な方法かどうかに関して私自身は疑問を持っている。この意味では高谷さんの固有性の論理を強調したい。

もう一つ、アジアの問題を考えてみたい。つまり、ヨーロッパから見れば、アジアはみんな同じにみえるのではないか？という点である。まさにそうであろう。私は川勝さんとは初対面であるが、そのファンの一人である。川勝さんの著作は比較政治学の必読文献にいつもあげている。しかし、昨日おっしゃった土地所有の問題には同意できない。ヨーロッパは土地所有指向型で、非ヨーロッパはそうではないという指摘は、まさしくマルクス的なアジア的生産様式論を現代にまで引きずった議論ではないかと考える。わたしはこの点において東南アジアをよく知らないが、インドではいわゆる近代的土地所有権ではないが、土地の私的所有権そのものは紀元前６世紀からある。ムガールの時もある。マルクスが誤解した土地の共同所有というのは上級所有権、つまり農民の上にのっかった征服集団のもの

であり、しかも部族の伝統が強いといわゆる自分達の支配権を維持する為に、取り分地を割り振っていく。それに対して農民が自分で土地に何らかの加工を加える限り、必ず土地所有権が、あるいはそれに類するものがでてくる。マルクスというよりロックの考え方、つまり私的土地所有権の起源といったものを問題にする時に、労働価値説のプロトタイプみたいなものをロックが出しているが、むしろこの方が正しいのではないかと考えている。中国、特に宋の時代以降土地が非常に激しく動くその様子を宮崎市定さんは描いておられる。いずれにせよ農民には土地の所有権が遅かれ早かれ生じてくるとこれまで学生に言ってきた。しかし、ロシアのミールはストルイピンの改革にもかかわらず力を持ちつづけ、結局個体的な所有といったものが、根付かない。これは私にとっては大きなショックでこのところロシアの土地制度を調べてみたが、どうもそのようである。おそらく、土地が有り余るほどあって、その耕作には権利というより、義務の方が強い。しかもミールに税がかかってくる。そうなると土地を持っていても、得しない。結局のところ、そういう中で、土地の所有権が出てこない。農民が土地の私的所有権を明確に主張しないという大変興味深い例だと思っている。

司会・家島　今の議論の中心は、地域像をどこで描き出すか？という点をめぐって行われている。地域像を考える場合、時代潮流の中で出てくる地域像もあるだろうし、また関係性を重視する立場から地域像を描くこともできる。あるいは高谷さんの議論に沿う形で言えば、固有性または古層、いいかえればその地域に根付いて古くから存続し、それが維持されているような地域の特性、あるいは時々の時代性を取り入れながらも常に時代を貫いているような固い構造、そういうものの中で地域像を考えることも出来る。以上では、こうしたヴァライエティに富んだ議論が展開されている。土地所有について、耕せば当然所有意識とか所有権が出てくるというお話があったが、中東とか、サハラ砂漠の周辺部だと、土地というものに人間が力を加え、水があり、そして安全があり、この３つが揃わなければ土地の価値はない。税の対象も土地そのものではなくて、土地で収穫されるもの、植わっている物、収穫物である。

木村　おっしゃるように私の場合は純粋農耕地帯を念頭においている。インドでもドアーブのあたりである。其の意味において東南アジアというのは、どうも違うようで、一所懸命で一所を守るというのではなく、ネットワークでゆるやかに動いていくそういうふうな感じがする。

高谷　東南アジアも複雑なので、その中のど

こをイメージするかによる。それで昨日は実はASEANと他の3つの地域をだした。ある人はマレーを想像し、ある人はヴェトナムを考える。すると、全然違う解答がでる。ヴェトナムはおそらくドアープと同じだろう。マレーは全く違う。だから、そういう意味で東南アジアといった場合、今ヨーロッパとの対比を考えるのなら、おもしろいと思うのはASEAN型の所である。だから、ヴェトナム、ビルマ、ジャワはやめとこや、という話である。これを比較の対象とすると、像がものすごく難しくなる。だから、森があって、魚とって、森林物産を採取して、というふうに言うと、プリミティブに聞こえるが、それがまた楽しげにやっている。それは決してプリミティブな人達ばかりではなく、異人も一杯いるという海域を考えている。そこを考えようということである。そうするとそこでは土地が一杯あまっているので、土地所有権の観念はない。

坪内　所有というのは難しい概念だと思う。経済史では所有の概念がしっかりとあるかもしれないが、誰がどこまで所有権を持っているかわかりにくいところがある。支配者が所有権を持っている場合、農民が持っている場合で話が随分違う。マレー世界では、支配者が土地の所有権を持っていないとも言える。土地を対象に税金を取らないと言うだけの意味である。テリトリーがないかというと、勢力圏らしきものはある。農民の場合は、ある土地を末代まで耕し続けるという観念は普通ない。一度ある土地を耕したら、次にも耕せる権利は保持しているという程度の所有権でしかない。しかし、その程度のものはある。

木村　所有権を誰が担保するのかという問題が重要。村であれば村の長。では村の長は何によって担保するのか、というとそれは慣習である。慣習が裁判所で認められる背景は領主権力である。だから、非常に錯綜している。にもかかわらず、私が主張したいのは、いわゆるこれは俺のものだ、という意識の重要性である。この意識は、もともと占有、つまりここに入るな、という意識からきている。占有権から実質的な所有意識がでてくるわけだ。こうした意識はヨーロッパ、非ヨーロッパを問わず、広まっていると考えている。

角山　占有権、所有権、支配権と近代的所有権は全く違う。近代的所有権というのは、近代的な法によって保護されている。今おっしゃったような議論は近代的法体系とは異なる制度、社会の下での話である。土地を守るとは、相手が攻めてきたらこちらが自分で防御することなのである。いわゆる近代的所有権というのは、これは完全に国民国家の近代的法体系の中で保証された近代的所有権である。これら両者を混乱しては困る。ここでいう近

代的とはヨーロッパのモデルである。ヨーロッパ中心の文明体系であり、この点アジアは違う。このヨーロッパの基準でのみ計れば、アジアが遅れているとかという議論につながってしまう。であるから両者それぞれの中味を慎重に検討する必要があろう。高谷さんがおっしゃるように東南アジアの中には様々なヴァリエーションがある。そして、それらが何によって保証されているかが大切である。いわば所有権の裏にあるもの、つまり所有権を担保する制度の検討である。イギリスは長い間慣習法に基づいてきている。古い積み重ねがあって、今やっと保証されている。長い歴史の中における保証である。ヨーロッパにおいても、革命によって一気に法制が転換した場合は別にして、特にイギリスでは近代的所有権も慣習法によって認められている。どうも一律にヨーロッパが論じられているようだが、決してそうではない。近代法を内部で作り出してこなかったアジア、東南アジアあたりでは、ヨーロッパの基準で捉えると具合の悪いものがたくさんあるだろう。地域研究で問題にするのはその点だと考える。

松原　角山先生のおっしゃるとおりである。地域研究の一番大きな意味というのは、高谷さんの言葉で言えば、固有性を見つけていくことだと思う。しかし、関係性と言うことを無視したら、逆に固有性ということも出てこないだろう。やはり、我々の具体的認識がまだ深まっていない部分が非常にある。例えば、角山先生のお話でも、原理が全く違うものが存在していると言うことを前提に考えなければならない。所有という観念にしても、これが全く欠落している地域というのが結構ある。遊牧社会などではまったくない。土地について所有という観念がない。現在モンゴルという国が近代国家の仲間入りをしなければならん、ということで土地私有法の議論がようやく始まった。土地を私有化しようという議論と、遊牧社会の伝統を守ろうとする議論がある。私はモンゴルの知り合いに会うたびに、遊牧社会の伝統とその必要性について語り合う。実態がどうかという点について我々がカバーしているわけではない。さきほど木村さんが中国についておっしゃったが、確かに宮崎さんのかかれたように実態としては様々なことが歴史的に起った。ただ、原理としては不変だと思う。土地の公有である。実態は私有が拡大して、虫食い状態になった時代もある。例えば、現代の中華人民共和国でも私有化は一切認めていない。毛沢東は所有の問題について、これは今までやってきたのと同じではないかとマルクス主義を理解する時思った、と私は推測している。所有に限らず、原理の違う地域が結構あるが、近代制度というものはこれを一律にしなければならないと考

える。一律主義である。ヨーロッパ、東南アジア、ユーラシアの遊牧世界を比較しながら、其々の固有性を見つけ出して行くこと、これが地域研究の一つの役目だろうと考えている。そういうものは体系的に整理できていないが、所有観念が欠落しているという点では、東南アジアと遊牧世界は共通性がある。それと、累積的蓄積という問題がある。遊牧社会はおよそこれが欠落している。そんなもの何でしなければならないのかと彼らは反論する。東南アジアもヴェトナム、ビルマなどをとれば、累積的蓄積が見られるが、これを除けば遊牧社会と近い部分がかなり多い。累積的蓄積を外在化しているか否か、モーメントとかそう言うモチベーションがあるか否か、という点でも遊牧社会と東南アジアは欠落しているだろう。渡辺さんのこの類型特性の表もかなりめった切りであるが、基礎の部分での原理が異なっているという前提を設ければ、それぞれの地域像をある程度作業仮説として結実させていくことは可能であると考えている。渡辺さんの話は地中海を媒介項としてみよう、という話だし、高谷さんの話は地中海とオリエントを敵対的関係としてみよう、という話がでた。其々の固有性を洗い出していった時、どこで違いが出てくるか、そこから始めなければ簡単に言えないということだ。私自身は地中海、トルコに関わってきているので、真剣に考えなければならない。オリエントとの関係で言えば、連続性を持った空間であると思う。後に、ヨーロッパが成立していく時に、ヨーロッパの人は自分達をギリシャ、ローマの正当な後継者であるといったが、これは詐称であると私には思える。地中海世界とオリエントとの連続性で見ていった場合、ローマ帝国とオスマントルコ帝国の連続性は、イスラーム、キリストという切り方をしなければ、見えてくるだろう。この会は頑張って東南アジアとヨーロッパを比較しようとして、初めからぐじゃぐじゃであるが、頑張ってやってみると、違う原理が明らかになると思う。私があげた累積的蓄積とか外在化はひとつの例にすぎないが、他にもでてくるのではないか。

渡辺　東南アジア研究センターの先生方にお叱りを受けるかもしれないが、地域研究というものについて私なりに日本でいつこうした関心が芽生えたかということを考えてみた時、一つの行き着く先は和辻哲郎の『風土』であろうと思う。『風土』を書いた時、和辻は当時日本資本主義論争が展開され、マルクス主義が日本に移植され、発展段階論的世界観、歴史観がうちだされてきたその流れに対抗する理論武装として、自らの仕事を明確に意識していた。自然的な与件との相互作用の中で、社会と言うものは類型的実在としてあるはずだという立場から、彼は『風土』を書

いた。ここでさきほどから問題にされている固有性に行き着くと思う。その固有性を生態的、風土的なものに求めるのか、木村さんがおっしゃったように制度的なものに求めるのか、いろいろな基準というものがありうると思う。何もない真空地帯に新しい展開は有り得ないのであって、逆にいえば、現実のひとつの社会、空間はいくらでも時間的にさかのぼることができる。だから、議会制民主主義の起源を考えた時、例えば、古代、あるいは中世の集会制度か何かにたどり着くことは可能だろう。それでは、いわゆる近代ヨーロッパの議会制民主主義に向かって、ゲルマンの集会が内発的に発展してきたか、というとそうではないのであって、様々な条件が作用して古代、中世のシステムが再生産されている。すなわち、古代、中世にあったものが現代もあるからといってそれが単に続いてきた、というのではなく、現代においても意味があるというように有らしめている何かある関係性が生じているはずである。固有性と関係性というのはあれかこれかの問題ではなく、相互作用の問題だと思う。ここで弁証法を持ち出してマルクスの威を借りることはやりたくないが、ともあれ、この二分法はあまり生産的ではないと思う。それと、そろそろ経済学者も問題にされはじめていい頃だと思うが、あえて角山批判を行いたい。さきほど高谷節で東南アジアの組織原理が謳い上げあられたと思う。しかし、角山さんは、いつまでもそういう段階ではないだろう、やがてもう少し近代的にとか、ちらっと段階論者の表情を走らされた。固有性とか関係性とかいう場合、高谷さんにしても歴史的な動きというもの、ダイナミクスを否定されているわけではないだろう。歴史的ダイナミクスを貫く太きものがある、しかし、それはヨーロッパ的な原理と違うものなのだということを鏤々お話になった。一つの一貫した論理に立っていると思う。他方、段階論的な立場で、もうちょっと近代的になっていいではないか、という角山さんのお話は、一旦否定したヨーロッパの虚構を実像として再び持ち込もうとすることになるのではないか、ということだ。

角山　東南アジアが変わらないということはない、という点を強調したかったのである。東南アジアはそれ自身のぐじゃぐじゃした中でも、どこへ行くかよくわからないが、発展つまり動きがあるということを指摘した。変わっていくであろう。例えば、あのジャワの強制栽培制度などを念頭においているが、かつて植民地時代に東南アジアが変わろうとしたものを人為的に止めてきた歴史があるのではないか。先進国のアジアにおける収奪は徹底していた。完全に排除と独占と搾取を展開した。だから、解放されれば、独自の発展、

展開があるだろうと思う。これから２１世紀の新しい東南アジア像を考える場合には単に東南アジアだけではなく環太平洋経済圏という形でルネッサンスがありうると考えている。

オランダのアジアにおける植民地活動はポルトガル人、中国人、日本人の商人を排除し貿易を独占しようとした。その排除の論理を東南アジアにおいて、しかも徹底的に生産収奪を行い、商業の独占もおこなった。そうして支配された数百年の影響はかなり東南アジアの活力を阻害してきた。１９世紀にヨーロッパ人が打立てたアジア停滞社会論、これは中国のみならずアジア全体を含めていると考えているが、そういうものが広まった。それがイデオロギーとして打立てられ、これを私はオリエンタリズムだと考えている。そういうものが今批判されなければならない。これが私の東南アジア研究の原点であり、私なりの姿勢である。

司会・家島　地域を考える上で、勿論、固有性というのが重要であるが、同時に固有性そのものは他との関係性の中で質的にも変質・変容するという点で議論が交わされているが。

応地　ヨーロッパと東南アジアが相撲を取るとして、土俵の大きさをどう決めるか、その形をどうするか、という議論をしている感じがする。生態的な捉え方にどんな意味があるのか？と川勝さんが最初おっしゃった。しかし、川勝さんが土地所有うんぬんとおっしゃった場合、土地の豊かさを問題にされた。つまり、豊かでないところで土地所有の観念が生まれ、豊なところは生まれないと言われたが、これはまさに生態論的立場ではないのだろうか。取り敢えず、東南アジアはない、ヨーロッパはあるということで比較することも可能だろう。

もっと大きい論点は、角山先生始め、世界システムのとうとうたる形成の流れがあり、その中にそれぞれの地域がどういうふうに組み込まれたかを、変化とか発展とか歴史という言葉で表現されているようだ。そういうものに対して、組み込まれるにしても各々の地域が固有性があって、そういう形の中でしか組み込まれないのだ、そこを大事にしようという話である。お互いに似たようなことを話している感じだ。東南アジアとヨーロッパを論じながら、ヨーロッパでは地中海とアルプス以北というものがどうだということを議論している。同じことは東南アジアでもいえて、やはり島しょ部と大陸部ではかなり違いがあって、ふたつのサブリージョンみたいのものを内側に持ちながら、しかも東南アジアの場合には中国だとかインドのような地域、東南アジア研究センターの人は外文明という言葉を使っているが、そういう大文明をまわりに

持っている。それと同じことが、実はヨーロッパについても言えそうだ。オリエントがあり、私の考えではオリエントの延長としての地中海がある。似かよった文明、空間的配列が同形性を持っている。そういう同形性というものが、歴史の展開に対してどういう意味を持ったのかということを議論の柱に据えられないかと考えている。

豊かさとは何か

司会・家島　今、豊かさということが出たが、豊かであるかどうかは意識の問題でもあろう。これはどうだろうか？

川勝　固有性ということをいわれているが、固有性の中に自己充足していれば、楽しめる。日本的な豊かさの基準はＧＮＰが世界一になったことが基準であろう。ＧＮＰというフロー基準である。しかし、現在では、心の豊かさとこれは違うということに気付きはじめている。物の豊かさと心の豊かさが違うというのは、結局物の豊かさを量で考えているからだと思う。たとえば香港はイギリスよりも金持ちである。一人あたりのＧＮＰは香港の方が高い。だからといって、イギリス人は自ら貧しいとは自己規定しない。自己の固有性に満足しているのだ。現在、何をもって富と考えるかということが問いかえされている。さしあたって、フローとしての富、ＧＮＰという考え方はおかしいといえよう。しかし何が富なのか、という問題は残る。人間が作り出す条件となっている生態、そこから作り出される有用なる物が富であるとすると、それらは全て目にみえる。人間の生を可能にしている物全体をどう捉えるか。人間が動物と違うところは人間が作った物全体、すなわちプロダクトコンプレックスをどう評価するかは大事な問題であり、それは富をどう考えるかという問題だと思う。

松原さんも言われたが、二者択一ではなく、固有性は関連性の中でしか出てこない。これはやはりいくら強調してもしすぎることはない。自分の世界だけしか知らなければ何が自分の固有性かわからない。固有性の自覚は関係性の中からでてくる。ヨーロッパの形成についても、オリエントのインパクトの中から自己形成していったといえよう。これが角山さんの基本的姿勢であるし、渡辺さんの資料でも明らかなようにヨーロッパの近代の中にアジアを見つけることができる。例えば、１６５０年とか１７００年のバーレンクンデをあげてみると、ほとんど東南アジア産だと思う。それが１８世紀末になると、綿などはアメリカとアジアとヨーロッパこれはスペインのことだが、これらをもって東南アジアの影響が少ないというのは実は言えない。１３・１４世紀のヴェネチアの商品、輸入構成をみ

れば９９％オリエントのもので、その大半のものが見方によっては東南アジアからきているとも言えるだろう。東南アジアはヨーロッパの形成に関連している。だからといって東南アジアの人はそのことに気付いていないかもしれないが。

高谷さんの「世界単位」は、御自分でコミュニケートされた諸地域の体験から生まれた。それに対して、例えば、ジャワに一生住んでいる人はジャワ的様式はわかるが、他のところはわからない。コミュニケーションを高谷流に足で歩いてやっと「世界単位」の認識はでてきた。地域を結ぶ人の交流が高谷さんくらいのレベルで行われるようになると、固有性の認識が出来上がる。生活様式に対する認識、自己の富に対する自己認識が生まれて、量に還元されない。それは最終的にどこに還元されていくかというと高谷さんの言われる生態になると思う。

さらに、土地所有に関して、私の説明がアジア的生産様式論の裏返しだというのは誤解だ。土地所有にもとづく「土地財産」で富を考える一種独特のヨーロッパ的性格をもった認識について申し上げたのであって、アジア的生産様式論争に足をすくわれると、議論の筋が違ってくる。富を土地所有と結び付けて考える見方が地域限定的なものであるということを示したかったのである。

永沼　今、川勝先生は豊かさの中に心の豊かさも入れられたが、昨日の報告では土地の豊かさ、あるいは豊穣さ、土地の生産力が土地所有と関連すると言われた。ここで、意識をいれると概念が不明確なだけに混乱するかもしれない。また、固有性と関連性という問題に立ち返ると、固有性の比較は地理学的比較、現在の時点における比較を当面進めた方が良いのではなかろうか。過去のある時点におけるヨーロッパなり地中海世界を現在の東南アジアと比較することはできない。個々の固有性はこれまでの対外的な関係も含めて作り上げられてきたものであって、内部的な発展だけでできたものではない。そうした蓄積の上に現在どういう社会が出来上がっているかをみれば、固有性の比較は十分可能と考えられる。そして歴史を遡れば、かなり長期間その地域に固有のものとして存在したものを見ることもできるだろう。歴史の中で新しくつくられてきたものが重層的に重なって固有性を作っている。生活様式などはまさにそうである。固有性と関係性を対立的に捉えられるべきではないだろう。

坪内　川勝さんのおっしゃる東南アジアの豊かさは、さきほど意識をお入れになったが、それを別にして、生活の豊かさか、それとも物産の特異性、豊富さか？どの種の豊かさを指しておられるのか？

角山　今問題になっている１６世紀つまりアジアが文明の中心であったその１６世紀においてヨーロッパでは富というのはわれわれの時代のＧＮＰとは違っていた。１６・１７世紀ヨーロッパの経済学では、金銀イクオール富であった。重金主義、重商主義である。これを批判したのが、アダムスミスである。スミスが『諸国民の富』の中で打ち立てた新しい一国の富の理論は、ピンのマニュファクチャで説明しているように、一国の富はこれを一言で言えば、労働の生産力であるとしたのである。その場合、切り捨てられたものは、それまでの心の豊かさである。別の言い方をすると、精神生活と物質生活が一体となっていた生活から、神を捨てたのである。物質を中心に、スミス流に言えば生産力という形で現在に続いている。これがＧＮＰにつながっている。あくまで量的なものであって、質的なものが抜け落ちている。１９世紀末になるとヨーロッパは神を捨てたというより、敢えて殺したのである。神に怖れることなく、自然を破壊しながら発展していくという人間像が出来上がった。そのヨーロッパが打ち立てたＧＮＰの基準をアジアやまだ神が生きている所に持ってきても、これはあてはまるはずがない。それぞれの地域の固有性をどのように豊かさの基準に取り込んでいけるかは、経済学の２１世紀に向けての課題である。また、地域の固有性との関連で言えば、それぞれ固有の時間というのも重要であろう。それぞれ固有の時間が流れていたのである。王朝の時間というのはその典型であろう。イギリスでもビクトリア朝などはしっかりと王朝の時間が刻まれていた。１９世紀末からキリスト教を中心とするヨーロッパ地域の時間と暦が世界の統一的時間になった。現在、民族固有の時間が残っているのは、イスラム世界を別にすれば、日本ぐらいのものであろう。アジアではなお旧暦の行事が民衆の中に広く生きている。固有のものを守りたいとどこの国も考えるであろうが、ヨーロッパの文明が支配している以上それに倣わないと仕方がない面がある。

ヨーロッパの固有性

司会・家島　ヨーロッパの固有性についてもう少し話を進めていきたい。

渡辺　角山さんがおっしゃった宗教の問題に関連して、これまで討論の中で前提とされたのは、ヨーロッパとイスラーム世界という対比であって、キリスト教世界とイスラーム世界という対比ではない。ヨーロッパでは、角山さんがいわれたように産業革命期以降、ヨーロッパ資本主義の発展が神を殺してしまった。確かに、中世的な観点からして、教会の権力が世俗の権力の後景に退いたというの

は事実である。むしろ、キリスト教の倫理が、マックス・ウェーバー的な意味のみならず、様々な制度を裏打ちする形で、それに倫理的な武装を加えることになった。この倫理的武装の下で、ヨーロッパがヨーロッパ文化として非ヨーロッパ世界に関係していった。今のヨーロッパでも、政策理念を考えると、例えばドイツの戦後の経済政策は社会的市場経済という漠然とした理念のもとでやってきたといわれる。これを遡っていくとキリスト教倫理にたどり着く。社会福祉国家ということを考えて行く時にも、最後の内面的な拠り所、理念的な拠り所はキリスト教の倫理である。その限りにおいて、キリスト教は依然としてヨーロッパ文化を支えているし、そのことでヨーロッパはヨーロッパとして他の世界に対して自らを主張しようとする、その姿勢は変わっていない。その限りにおいて神はまだ生きている。それをヨーロッパの固有性というかどうか、ここでは踏み込まずにおきたい。ともかく、宗教に関して言えば、依然として、キリスト教はそれなりに大きな意味を持ち続けている。

角山　私はさきほど「神は死んだ」というニーチェの言葉をひいてきた。それは１９世紀末の思想状況を示している。渡辺さんがおっしゃったことは、神は仮に死んだとニーチェが言ったにしても、そのヨーロッパのアイデンティティの核心の部分がやはりキリスト教文化だということであろう。ヨーロッパとは何か？といった場合にこのキリスト教を抜きにしては語れない。そういう意味では本質的なものである。それは今渡辺さんがいわれたように、社会の隅々まで、いろんな形で残っている。そして、企業経営の中のみならず、個人の日常生活の中で教会に行く人が少なくなっても、心の中に脈々と伝わっている。派がいろいろあるにせよ、キリスト教によってヨーロッパがまとまっていると思う。他方、東南アジアという地域には世界のほとんど全ての宗教が存在している。しかも長い間平和的に共存してきた。それに対し、ヨーロッパではキリスト教徒同志の宗教戦争やイスラムとの対立が繰り返し起ったが、アジアではそのイスラム教でさえ、おとなしい。ヨーロッパの周辺で起こっているような、現在まで脈々と続いているような宗教の民族紛争がアジアにはない。平和的に共存しているということだ。諸文明の平和的共存の２１世紀的モデルになるような、そういう歴史を作ってきた。アジアにおける豊かさの裏で、宗教が果たしてきた役割が非常に大きい。現代経済学では未開発地域が工業化しにくいのは宗教が経済成長のマイナスの役割をしているという。というのは、少しでも社会的余剰が生まれると、ほとんど宗教に使ってしまうからである。

パゴダとかモニュメントなどに投資される。貯蓄が投資となり経済発展を促すという経済循環がワークしないというマイナス面がある。宗教が経済成長の阻害要因になっているという説がまかり通ってきた。東南アジアにいくと人びとは宗教と密接に関係した暮らしの中に生きている。経済成長が進み、金儲け一辺倒の風潮がはびこる現代の東南アジアで、こうした人びとの宗教生活が崩れていくのかいかないのか、東南アジアの本質にかかわる大きな変化だと思う。この地域には従来大きな投資がなされてきたが、それは主として華僑資本、しかもせいぜい商業資本であった。１９８５年がひとつの転換期であった。それはちょうどソ連にゴルバチョフが書記長になった年であり、その年の９月にプラザ合意があり、その後日本の投資が東南アジアを始めアジア各地に向かった。投資のスケールは、はじめ点であったのが、いまや点ではなく、面で拡大している。当時は東南アジアへの投資に懐疑的な企業も多かったが、最近は変わってきた。もはや後戻りのできない所にきている。こういう中で、心の豊かさが失われていくのかいかないのか、新しいアジアの文化が生まれつつあるのか否かに関心がある。私が注目しているのは、日本のポピュラーカルチュア、漫画、ポップソングとか、カラオケとかの進出である。こういう所から何が起こるのか？心にどういう変化がおきるのか？神を捨てるのか？などの問題が新しい問題として起こってくるのではないか。そのとき人びとは神は捨てきれないだろう、と個人的には思っている。しかし、人びとのくらしは都市型になって行く。そして新しい神への信仰が生まれるかもしれない。東南アジアでも大都会になればなるほど、農村の暮らしと違う、都市における孤独な大衆が群生する。そして彼らはやはり神様を必要とするだろう。この点について、特に高谷さんに見通しをお聞きしたい。

東南アジアの本質

司会・家島　議論は東南アジアを考える本質、核心部に少し近づいてきたようだ。ヨーロッパをまとめる柱、統合する理念としてのキリスト教について指摘され、工業化、近代化の中でもキリスト教が強くいき続けたという話が出た。しかし、キリスト教をめぐる宗教戦争も激しかった。そういう点ではヨーロッパをひとつに考えていいのか、という問題も出てくる。他方、東南アジアは様々な宗教と人間が集まっていた。しかし、今までに大きないわゆる宗教戦争はなかった。それは何故か？これは東南アジアを考える本質の一つなのか？そのことが今後どうなるか？というお話だった。

高谷　答えになるかどうかわからないが、私の考えているところを申し上げておきたい。これから東南アジアどうなるんだ、という時に、角山先生御自身もおっしゃったが、東南アジアは新しい文化を産むのだろうか？という問いかけがあるように私には聞こえた。もう少し言うと、東南アジアは今まで何にもないではないか、というお考えがあるのではないかと思えた。そうだとすると、その考え方はまず、全然違うと思う。松原さんの言ったように全く違う原理、全く違う文化が厳然としてある。だから、これから新しく作るのではなくて、私に言わせれば、その原理がこれからも続くということである。

その原理は何かと言うと、ほんとは詳しく説明しなければならないが、端的に一言で言うと、男の美学だと言うことだ。男の美学といっているのはヨーロッパの人がキリストと向かい合っている、キリストという一人の神に向かいあっているのと全く同じようなもので彼等は周辺にいる諸々のカミガミに向かいあっている。そして、それらの神々に愛され、神々に味方をしてもらえるような人間になるように日々研鑽している。その生き方は本当に美しい。それが男の美学だ。東南アジアの人達の間にはそういうものがある。しかし、本当のことをいうと、最近ではその美学がゆすられている。カネが欲しいとか、便利な生活がしたいとかで揺られている。金が勝つか、美学が勝つか、今のところではここのところはわからない。東南アジアがどうなるかは答えを控えさせていただきたい。

ただ私としては全く同じような問題が何も東南アジアに行かなくても日本にあると思っている。私自身のなかにある。それはどういうことかと言うと、例えば、今の稲作の問題だ。私は田舎に住んで、百姓をやっている。まわりは皆米を作っている。そこへ学者が来て質問をしている。コメ作りなんかしていても、もうからないでしょう、しんどいでしょうと切り出して、クエスショニアを渡したりする。すると、それに対しては、私も含めて皆が、しんどい、止めた方がいいと思いますという答えをする。本当に。しかしながら、この答えは本当に私達の真実の答えなのかどうか怪しい。米作りが本当にだめだとか、新しい時代は違うものに転換しなれければならないと本当に思っているかというと、どうも違う。何か近代の約束ごとみたいなことがあって、「しんどいこんな汚いことはやめて、もっと楽なカネもうけしたらどうですか、その方がいいでしょう」ときかれた時には、「はい」、と答えるのが、ルールになっている。だが、その答えが本当の気持ちかどうかと言われるとこれは違う。そこのところもまた見極めて欲しい。

男の美学などと言うと、男の美学と近代合理主義を比べたら、問題にならないよと、新しい大きな文明が入った時には、皆当然そっちへ動くよと、よそ者にはそうみえるかも知れない。しかし、それは違う。当事者は本当は違ったことを考えている。いや正確にいうと、そこのところは当事者でもわからない。私は田舎に住んで、やっとローカルな文化、地域に生きるということが少しずつ判り出してきた。これはがんじがらめな隣組に生きるということであり、本当にしんどいことですわ。いやなこと、逃げ出したいことである。だが、私は文化というのは、苦しみと背中合わせになっている、その中で、その両方を噛みしめ味わいながら生きていくものだ、と。人間というのはそういうもの、地域というのはそういうもんだという確信が出てきている。私は、東南アジアの人達の心のうちをわかるとは言い切れないが、おそらく日本の村にいてそう考える私と同じように考えるだろうと、そう思っている。それは外には見えないが、彼等の男の美学は、私が稲作を選択する如く残っていくだろう。それは外からは一見みじめに見える人生である。いわゆる発展ではない。だが、ある種の納得をし、味わいながらそのまま生きていくだろう、と考えている。私は地域というものはそういうものだと考えている。これが、答えである。

応地　男の美学の続きの話ではないが、さきほど角山先生が東南アジアの発展というのは、いわば不可逆的であって、失うものもあるのではないかというお話があった。むしろ経済学者におききしたい点がある。さきほど触れられたプラザ合意以後、資本の国際移動が大変活発化した。それに対して、労働力の国際移動はほとんど変わっていなくて、そのギャップはどんどん大きくなっている。東南アジアは投資により活況を呈しているが、それは１９８０年代の日本のバブルみたいなものではないかと考えている。バブルにしない為には、新しいイノベーションが東南アジアの中で生まれなければならない。そういう基盤が東南アジアにあるのかという問題。それがなければ、資本と労働移動のギャップを利用されるだけで終わってしまうと思う。

私はインドにはイノベーションがあると考えている。僕はインド帝国主義者なので。インドの場合は一つのイノベーションを自らの中でやっていく知力を持っている。というのはこれからの世界は知識集約産業になると、人口の多いところが勝ちだと思う。オリンピックと同じで、運動能力の高い者も、人口の多いところから出てくるだろう。日本も５０何億中の 1.2 億分でしかなくなるという気がする。もう一つは市場をどこに見出していくかという問題がある。今、日本への逆輸入と

いう形で拡大しているが、東南アジアというのは経済成長ということで言うと、バブル的なものが終わって、結局中国やインドに行くある一つの実験場で終わってしまう可能性もある、という気がする。これは男の美学と全然関係ない話だが、経済学の方がたくさんいらっしゃるし、東南アジアの今後の話になっているので、この点についてお話を伺いたい。

坪内　高谷さんは男の美学で、宗教の本質を見抜かれている様だが、卓見だと思う。私はここで、より現象的な話しに戻したい。バンコックなどでは非常に売れっ子のお坊さんがおり、説教もうまくて人気を集めている。それは脱宗教ではない。

マレーシアの東海岸の田舎で仕事をやってきた。そこだと、今度は近代化、近代化でクアラルンプールを中心に資本、労働がそこに集中しているが、クランタンという私の調査地は労働力をどんどん出していく所である。そこに残された人達の生活、出ていった人の生活の中ではどうかというと今のところは、宗教は死んでいくのではなくて、残されたところでは強まっている。私の付き合いは３０代からで、３０年近くたっている。まわりに残っている人達が年取ってきているからそう思うのかもしれないが、起こっていることは全体としてえらく宗教づいてきたという感じである。これは反動、反発かはわからない。中央の広く物質的な動きに対して、このクランタンでは精神主義が出てくるようなところがあり、イスラムの本質に帰ったり、法律まで作って、断食月に違反した者は捕まえるとか、女性に髪を隠すように強制する動きが出ている。宗教が死ぬのではなくて、もう一回盛り返すような要素があるという気がする。

また、ポンドックの事例を紹介したい。宗教の勉強をする所である。学校のない時代は、若者が集まって、えらい先生から宗教を習うというのが原形である。学校教育の影でポンドックはべらぼうにだめになった。なくなるかと思っていたが、変形した形で、持ち直している。頼りないポンドックなどでは、お年寄りが住んだりして、一種の社会福祉の機関になっている様だ。伝統の見直しが起こっていると感じる。行き先はわからぬが。また、確かに、クアラルンプールなどの学者の一人はお祈りの仕方も知らないし、だいいちモスクには行かないと言っていた。都会にはこうした人も少なからずいる。しかし、こうして神は死んだのかというと、実はそれとは反対に、これに拮抗するような現象が東南アジア全体にもう一回起こるような要素もあろう。今後の動きは決して全部が消えていき、近代化そのもの、合理主義そのものには向かわないという気がする。

司会・家島　東南アジア的なものを考える

時、様々な宗教が歴史を通じて、重層的に存在しているとおっしゃった。確かに、ヒンドゥー、イスラム、仏教あり、それらが共存し、東南アジアというひとつの空間に存在している。そして存在し得た。このことを東南アジアの豊かさとか余裕と結び付けてよいのだあろうか？そして、今後これがどういうふうになっていくのか？宗教的対立を消去する原理を東南アジアに求め得るのか、そこに東南アジア的なものを探ることができるのかということも一つの問題だと思う。坪内さんどうだろうか。

坪内　もう一つの宗教的な現象をお伝えしておきたい。マレー半島を車で走っているとインドから来た人が、えらく新しいお寺を作っている。ヒンドゥーのお寺である。インドのお寺が目立ちはじめている。金持ちになってつくることができるようになった。その背後にあるのは、少なくとも世俗化そのものではない。マレー人にとってはメッカに行くことが大事である。ハジの数がべらぼうに増えている。冷蔵庫にならずに、ハジになるところがおもしろい現象だ。宗教に対してお金を使うという行動、これはおもしろい。そのことと豊かさとはどうくっつけることができるか？経済学者に考えていただきたい。精神の豊かさを追求していこうというところが一方ではあるような気がするが。

角山　シンガポールあたりでは、タクシーに乗ると、運転手が運転席にマスコットをおいている。何かときくと、日蓮だと答える。創価学会なんですね。その関係の人に聞くとものすごく増えている。この現象を、さきほど言いかけた、新興宗教、特に都市型の宗教が拡大しつつあり、それが新しい東南アジアの宗教として注目すべきだと考える。何故かというと、タミールとか移民たちは故国を離れて一人で出稼ぎに来ている。とにかくなにか頼らないと寂しくてしょうがない。それが都市の暮らしだと思う。農村であれば、モスクとかに行く事によって、祈祷ができ、そこで共同体の人との交流ができる。それが都市にはない。もちろんシンガポールにはいろいろな宗教があるが、それに行けない連中もかなりいる。そこに新しい宗教が入ってくる。

坪内　おそらくそれは正しい。私なりの偏見を付け加えると、都市は個人を裸にして、孤独にする。ジャカルタでもどこでも、スラムに入ると、スラムというと西欧では個人がばらばらになって、生活するところであるが、東南アジアのスラムでは人間関係の紐帯が強い。同じように都市が田舎とつらなっていくという事を考えると、無論西欧や日本に比べて相対的なのだが、田舎と都市の結びつきは日本や西欧の比ではない。東南アジアの都市を西欧型の都市と同じタイプで捉えるすぎて

もちょっと問題かなという気はする。

応地　さきほどから宗教の併存という事が、非常に東南アジアの固有性、特徴ではないかというお話が続いている。私も賛成なのだが、その背後には豊かさよりも、ヨーロッパと東南アジアの植生、エコシステムの違いがあると考えている。東南アジアのように、いろいろな種類の木があるかわりに、それ自身の個体の数が少ないというエコシステムである。そういうのはgeneralized ecosystemといっているが、それに対してヨーロッパは白樺なら白樺の木がずらーと生える。種類はごく少ない代わりに個体数は多い。そういうスペシャライズされたエコシステムがある。東南アジアのように多種少量的な植生を持ち、それに対応する地形的条件も多様性があるところでは、より多面的な土地利用が可能である。そういうところでは、逆にいろんな人がいろいろな形で競争しあわずに、ある関係性を保ちながら、男の美学を発揮したりして、生きていけるような空間である。そういうところから東南アジアは、極めていろいろな人が、多面的利用を行い、人を受け入れるようなオープンなところであった。東南アジアを語る一つのキーワードはinmigration だと思う。それは何も島しょ部だけではなくて、大陸部であっても雲南からどんどん人が入っていって、そういう人達が現代のタイ族の中心を形づくっている。そうした対比で言うとヨーロッパというのは、いわば地球上における最大のoutmigrationの地帯であった。新大陸、シベリアへの開拓を見ると、アフリカの黒人奴隷たちをはるかに上回る数の人達が外へ出ていった。直接全部がエコシステムとは関係がないけれども、そういう何かoutmigrationが優越するヨーロッパと、東南アジアのようにinmigrationをいくらでも受け入れる、同時にこれはクローズドとオープンに関係するが、たとえそれが、ヨーロッパの発展の結果であったとしても、そういう体質の違いがあった。東南アジアの場合、オープンであって、かつ多面的な利用が可能であるという事が、宗教の併存にもあらわれているのではないかと思う。

永沼　応地先生は植生の違いからヨーロッパと東南アジアを比較された。しかし、現在のヨーロッパでかつてのヨーロッパをイメージすると少し違う。地中海世界は乾燥地帯としてとらえられるが、これも時代をさかのぼると、決して乾燥地帯ではない。かなり森林の豊かな地域であった。現代のイタリア、特にトスカナなどは典型的な田園風景として、非常に美しいと言われるが、ほぼ１５~１６世紀頃にできてきたものであって、それはかなり人工的なものである。ヨーロッパには原始の森は残っていない。何らかの形で、人間

の手が加わっている。人間が作り上げた森である。ヨーロッパの森は人間が利用し尽くした結果である。そのあとも人口が爆発して、その状況の中でヨーロッパ人は外の世界に出た。土地に対する意識は、個人の所有権の話を戻してきた時に果たしてヨーロッパ世界と非ヨーロッパ世界で明確な対比が言えるのか、私は疑問である。ヨーロッパ人を大きな集団として考えると、土地への執着が見てとれる場合がある。例えば、レコンキスタでキリスト教徒がイスラム教徒を征服して、その後多数のスペイン人が出ていった。征服者達の出身地エストラマドゥーラというのはひどい土地で、砂漠みたいな土地であったわけだが、それだけに、面としての土地に執着し、新たな土地を奪い取っていった。それに対して、東南アジアの歴史の中で、自然をまだ利用し尽くしたというレベルには達していない。そうした状況の中では土地に執着する必要もない。ヨーロッパでは土地は利用し尽くされており、東南アジアではまだ利用し尽くされていない。そこの違いが土地所有のあり方の違いに出てきているとも言える。ところで高谷先生の言われた男の美学というのはそれぞれの社会にそれぞれあって、東南アジアにだけあるというのではないのではないか。少しタイプは違うかもしれないが、それぞれの地域にそれぞれの男の美学が厳然とある。ヨーロッパの場合、男の美学にプラスして、角山先生が言われたキリスト教的な道徳観・倫理観が共通項として存在する。世界の地域の中で、ひとつの単位として捉えられるのはヨーロッパだけではないか。そのひとつが、キリスト教的な道徳観と倫理観、よく言われるボランティア精神などそこから出てきていると思う。ヨーロッパを大きく捉えた時のヨーロッパの固有性の一つだろう。

木村　男の美学というのはわかるが、その男の美学だけで一つの地域なり社会を統合する事はできないと思う。だから、それは、東南アジアはぐじゃぐじゃやとおっしゃった裏面の現象なのだろうか？

応地　高谷さんが昨日おっしゃっていたのは神々に愛される倫理が強いという意味でしょう。神々に愛される心が強いというのは社会を統一するものになるのではないか。

木村　非常に主観的になる。要するに公的イデオロギーとか組織とかじゃなくて、あえて男の美学と表現された、受け手の側からの主体的な働きかけが非常に強い、そういうタームを使われた点が大変意味深長だなと思った。

高谷　神々とおっしゃったが、ヨーロッパですと、キリストの前に立った男達。ところが東南アジアですと、ある人を守っているのは巨木かもしれない、別の人を守っているのは魔術師かも知れない。また第三の人を守って

いるのはヘビかもしれない。全部違う。で、何にもまとめるものはない。ばらばらなのである。だけど、そういう恰好で纏まりを作っている。他者との関係を作っている力というのは、いわゆる二者関係というものだ。組織の会員を縛るイデオロギーや法律などというものはない。だが、各人はその時出会った相手と、いわばカミの前での確かな関係を結ぶ。例えば、私が坪内さんと出会う。すると、その時私はこれは尊敬できる力があるやつかどうか、パッと見て、この二人の関係を作る。坪内さんが上なら私はその時子分になる。坪内さんが勝れている限りにおいては私は坪内さんの子分だ。しかし、彼がダメになったら私は子分をやめて別れる。そして、別れたらもう関係ない。そういう文字どおりの一匹狼ばかりがおる。だから、地域の統一性というのはない。あるとすれば、なんというか、人間もその中の一部であるカミ、自然、人間の一緒になった汎神論的世界がそこに広がっている。

木村　高谷さんがお住まいになっている非常に統合度の高い地域社会の男の美学とは違うのか。

高谷　全く違う。

動く物産複合

川勝　男の美学の男を取ったらどうかと思う。美学というのはどこにでもある。美学というのは立ち居振る舞いに一種の型性がある。タイプがあるということだ。その立ち居振る舞いというのはやはり見せるので、見せる対象と見られる対象がある。それなりの舞台装置がいると思う。ですから、体だけではできなくて、ナイフならナイフがいるし、マジシャンならマジシャンを飾るものがいる。東南アジアには東南アジアなりの見せるためのセットがあると思う。心の話から宗教に話が進んでいるが、キリスト教徒は空中に浮かんでいるのではなくて、キリスト教を示そうとすれば教会に連れていく。教会に連れていって、これは何世紀に作られた何々だなどと、説明して、キリスト像を説明し、聖書を見せる。では、イスラム教は何か、と聞けばモスクに連れていくだろう。仏教ならお寺につれていき、神道なら神社に連れていけばよい。そこで神殿は森に囲まれている為、森との関連で、汎神的な世界像を説明するということになる。このように宗教も形ある物が結びついている。物は自然が作り出し人間の手の加えられた物であるということで、自分達の心性、思い入れを入れた形になる。その場合に幾何学的なモスクのような物の形もあれば、山と一体になった形ではじめて説明できる神社のような物の形つまり products の complex がある。そういう物がなければ宗教も神も宿れない。

心に宿っていても、それを外在化して説明し、自分がそこで聖なる気持ちを表すには物が必要で、人間はこれを形にして表現している。その表し方が違う。そこがおもしろい。渡辺さんが和辻の『風土』のことを言われたが、永沼さんのお話とも関連する。イスラムの世界はまさにモスクの世界で幾何学的だ。その幾何学的な形はどこから来ているかというと、天上の星からきている。あとは砂漠の死の世界だと和辻は言う。ヨーロッパは自然を十分に利用し尽くしてきれいで、馴化された、人間の人為が入っている世界であると言っている。そこにまさに美学がある。それは目に見える物の形だ。それは同時に、生態と関わっている。ヨーロッパはラテンアメリカに行ってむちゃくちゃをやりつつ、必ず教会を建てて、自分達がなんであるかを証明した。自分達の生活の立居振舞を表すべきセットを作ったのだ。それは結局生態も持っていったという事ではないか。自分達の生活、つまり牧場や馬を持っていって、それに見合う生態を作った。ブラジルにドイツ人がいった場合と、日本人がいった場合は景観が違う。日本人は日本の植物を持っていって、ブラジルの中に日本にあるほどのものは全部植えた。例えば、桐などはどんどん育つので、家財にしようと思っても中がぶよぶよで使えない。にもかかわらず、何もかも全部移植した。桜もある。結局そこに人間の生活様式全部、生態系含めて持って行ったのだ。かくして生態は動く。そういう生態を動かす存在が人間だ。言い換えると、人間はproducts mixとともに存在し、生態を変える事ができる存在である。日本の問題は、角山さんがいわれれたように都市生活の中で、みんな箱の中に入って生活しており、均一になった。都市生活の中では、日本では見せるべきほどのものがないので、さみしい。さみしいという感情がどこから来ているかと言うと見せるべきほどのものがなく、個性を持てないところから来ている。それは結局、心の貧しさが物の編成の仕方とが深く関わっているということだ。立居振舞に美学が成り立つとすれば、それを可能にするproducts complexをどう作るかが肝心だと思う。たとえばモンゴルなどで土地の私的所有制など、とんでもないことだろう。土地を区画して、馬がそこから出たらいかんということになれば、男の美学を言っている場合ではない。地域に応じた、自然を含めたproducts complexの中で人間が生きている。products complexは動く。ヨーロッパの場合でも２０００年の間に、あるいは過去１０００年ぐらいの間で森をなくした。森林が伐採されたのは歴然たる事実である。シェイクスピアではないが「森は動く」。products complexは動くのだ。

司会・家島　宗教的な問題で議論が進んでいるが、さきほど応地さんは東南アジアの多元的な宗教、あるいは民族の移動性ということを言われ、応地さんは多面的な自然利用が可能であり、植生が多様であることと関連付けて説明された。もう一つ、熱帯雨林というところから、自然の復元力という事が言えるのではないかと思う。いかがだろうか？

高谷　東南アジアの森についてのことである。これは認められるかどうかは別だが、私が堅く信じているのは、森に価値があるのは豊かさの故ではないということだ。暗さと恐しさの故だ。東南アジアの原郷というのは、こんな感じである。集落、これは高床で、だいたい１０軒ほど家が並んでいる。そのまわりで、焼き畑をやっている。作っているのは稲、陸稲があるが、それを１年作るとよそへ移る。翌年はまた、よそへ行くという事をやる。稲の植わっているまわりにちょこちょこと草地がある。これは１－２年前に焼畑の行なわれていた所だ。そして、その外側には広大な森がある。そこは入ると、日本の森でもそうだが、まず髪の毛がピーンとまっすぐ立つ。恐い。

森に入ると、こういう具合だ。ぼーっと幹が見えている。よく見ると、根っこがぶら下がっている。大きな木の向うは見えない。何層もの樹幹が重なっている。そんな所に行った時、思う事は俺は悪い事はしていないんだ、だからどうぞ神様助けてくれ、何もしていないんだからという事である。ものすごい巨大感と神秘性があって自分などはとうていここではこの暗がりには勝てんと、思わせられる。ところが、その男の美学のあるやつというのは、そういう所に入った時、神々に守られている連中だから、全然恐がらない。いってみれば役小角みたいなやつがいっぱい居るということである。

宗教が植生と関係しているといった時、多様性という事もある。豊かさということもあると思うが、それよりも暗さという事とより深く関わっていると私は思う。その暗さから出てくる怖さは、砂漠で雷に出遇う時のあの恐さともまた違う。砂漠の雷。あの時の強烈な恐さと違って、もっと弱々しい。しかし引き込むような神が居る恐さなのだ。カッパとか幽霊とか、木の精霊とかそういうものから来る恐ろしさだ。そうした者がいる森の中に起こってきたのが、私はアニミズムというものだと思う。ついでに申し上げると、東南アジアで宗教が混交していると言われるが、私はそれはほんとは違うと思う。唯一そこにあるものは汎神論、ヨーロッパの言葉で言えば、アニミズムというものである。

私の友人の話しをしてみよう。私の最も親しい友達の一人はイスラーム教徒だが、六根

清浄を唱えて山へお墓参りにいく。そんなイスラムはあってはならない。イスラムというのはアラーに任せれば、墓など作ってはいけない。六根清浄もいけない。そういう事を彼はちゃんと知っているが、御先祖の霊を慰めに六根清浄といってほんとに墓参りに行っている。そこのあるものは祖先崇拝であり、アニミズムである。イスラムが来てしまって、伝道者達があなたはイスラムだというので、彼等自身もああイスラムですといっている。お前はヒンドゥーだと言われるので、ヒンドゥーだといっている。キリスト教になれというので、はいはいキリストになりましたといっている。しかし、本当の心の中は、イスラムでもヒンドゥーでもキリストでも、何でもない、ということだ。あそこには厳然として東南アジアの森を怖れる宗教というのがある。それが東南アジアの原理だ。これが私の東南アジア理解である。

応地　さきほど復元力の話がでたが、復元力はもちろんあるのだが、だけどそれはいわば熱帯雨林の場合でもおそらく２００年ぐらいで大きい木も更新されていく。そういう形の自然更新を行っている。そういうリズムの中で、もちろん復元力を持っているのだが、今のように皆伐してしまうと、その力も小さい。ヨーロッパ人達は、熱帯に来て、ああいう大木の茂っているジャングルだとか、一晩で大きくなる竹を見て、熱帯の土壌は豊かだととらえた。それが１９世紀末頃になると今度はラテライトなどは痩せた土地だという事を理解していく。そういう意味で言うと、復元力というのは小量のものをねらって、多面的にちょっとずつ使うのには支障がないのだが、現代のようなやり方だと復元力は極めて乏しいというのが実情ではなかろうか。

永沼　森林の皆伐が進んでいる。東南アジアの場合、それで森の復元力がなくなるということになれば、かなり景観が将来大きく変わる可能性がある。そうすると森があって、森を異界、魔物の棲む世界として見ることによってアニミズムがあるとすれば、森が失われていくことにより、そういう宗教的な態度も変わっていくかも知れない。ヨーロッパの場合、キリスト教が一元的に広まっていくように思われがちであるが、中世前期までは点、つまり都市の宗教であった。森の中にはほとんど入っていってない。それが、１２~１３世紀の都市化の波が進む事によって、急速にキリスト教が社会に広く浸透していく。ヨーロッパでもアニミズムの痕跡というのは各地に残っている。そうすると東南アジア社会の存続にとって森の存在が重要な意味を持ってくると考えられる。

坪内　根源は森であろう。しかし、次の要素は人間の少なさであろう。人間の少なさでど

こまで説明できるか、というのが私の一番大きな関心事である。森と人間との共存という形での、その人間の少なさを気にしたいと考えている。人間の少なさについては、随分前に草原の方がもっと少ないぞといわれて松原さんから叱られたが、草原での人間の少なさとは全然意味が違う。砂漠、北極とも違う意味での少なさがある。生産力について言えば、基本的には木は育つ世界、その意味では豊穣の世界の中の人間の少なさという感じである。ボルネオ、スマトラ、スラウェシなど一部では森は残っている。しかし、ジャワは現在１平方キロメートルあたり、７００~８００人住んでいるところである。日本よりはるかに人間がひしめいている所である。これが、１８００年代の始めにラッフルズが数えた数は４５０万である。現在の１０分の１、２０分の１という少なさである。ジャワもその原形はここに求めてもいいような気がする。他方ヨーロッパも人口の少なさが言われた。そういう少なさと東南アジアの少なさはどう違うのか、同じなのか？ヨーロッパは都市の文明が栄えたところとされているが、地中海世界の都市はどうか？違う意味で理解しなければならないのだろうか。

司会・家島　いつのことであろうか？

坪内　ヨーロッパの典型が作られた時の話。現代を説明するにたるだけの基礎が形成された時期と考えても良いと思う。

近代化論

角山　ヨーロッパにおいて人口が増えてきたのは産業革命の少し前１８世紀初めぐらいからである。それまでは、人口が増えても、また減少するというサイクルの繰り返しであった。それは疫病とか戦争など、とにかく人口調整の要因が必ず出てきたからである。こうして長期にわたってほとんど人口停滞の状態が１８世紀の始めまで続いてきた。それから急速な近代化、工業化とともに人口が増えて今日に至っている。だいたいヨーロッパの人口はそういう傾向にあった。ヨーロッパもかつて森で覆われていた。しかし、東南アジアと違って、山岳の森ではなくて、平地林が多い。しかも南と北で違うが、イギリスなどは始めから、森林というのは３２％ぐらいしかなくて、あとは岩やヒースの荒れ地が続いていた。もともと木の少ないところであった。木の少ないところで、いち早く１６世紀中頃から深刻な燃料危機が起った。開墾による伐木と木を燃料として使っていたからである。燃料の用途が生活用から工業用に用途が拡大し、さらに羊を飼うことによって森林が疎林になってしまった。一旦疎林になってしまうと、再生ができない。森林をどんどん減らしてきた。さきほど森林が恐いとおっしゃった

が、全くその通りで、実は京大人文研での今西さんの研究会、３０年ぐらい前ですが、今西さんやら、中尾佐助、梅棹さん、ここにいらっしゃる松原さん達から、その話は散々聞かされて、梅棹生態史観の次に何やるのか？ということになった時に恐い神さんをやろうということになった。そして、神々の研究を始めた。今、高谷さんがおっしゃったアニミズムについても、これまた魑魅魍魎がいて恐いんだ、アニミズムの世界の研究をやろうということになった。神々はヨーロッパの森にもいる。ヨーロッパの森には魑魅魍魎が住んでいるという恐さではない。しかし、やはり恐い事は恐い。だが、急速にヨーロッパでは木がなくなり、同時に工業化が始まった。この恐さというのは、ヨーロッパの場合、人間に危害を加える動物に対する恐ろしさだ。この動物を征服するという形で、人間は自己防衛を行ってきた。恐い森林を全部取ってしまったら、恐い動物も消える。そういう形で開墾も同時平行的に行われた。こうして森の恐さをというものを征服してきた。これが近代の文明である。ところが東南アジアでは森は再生する。ずっと続いている。それが特に、南方のジャングルは別にして、いわゆる照葉樹林帯では典型的に起こる。そこは神々が住むのに最も適した場所であって、この神さんが日本的な、アジア的な特徴のある神さんになっていく。そしてこれが、征服の神さん、キリスト教と違うところである。遊牧世界などは、もっと恐い神さんになっていく。全部征服の神さんになっていく。そういう宗教論をやっていた。つまり生態論が宗教論に発展していった。梅棹生態論、あるいは今西生態論も、神々の問題を扱う事になった。その時に来ていただいていたのが、梅原猛さんとかで、そこから生まれたのが、上山春平氏と中尾佐助氏の照葉樹林帯の著作である。そこに行くと生態学から離れて、生態学の上部構造と私が言っているところへ行かざるを得ない。しかし、そこから近代の話が出てこないのである。ところが、川勝さんの海洋史観が梅棹生態史観批判として出てきている。これは是非やらなければならない。近代というのがどのようにそこから出てきたか、という事をやる必要がある。梅棹生態史観のどこから近代が出るのか？と同じように、高谷さんには生態学的なところで質問してきたつもりだ。私はヨーロッパの場合、薪炭の枯渇、これがエネルギー革命を起こした。これが産業革命につながっていくと考えている。その限りにおいて私は海洋史観を媒介にしなくても産業革命をエネルギー革命から解けると考えている。もちろん、それは産業革命をエネルギー革命と定義した上での議論である。海洋史観は生態史観を補足するとともに、総体として産業

革命論の再考を促すものである。どうも神さんの話までは同じようにきたのだが、この先東南アジアから近代化・工業化は出てくるのだろうか。工業化でなくてもよいが、それでは何がでてくるのだろうか？それがさっきからわからない。

渡辺　なぜ近代が出てこなければならないのか？ヨーロッパもいわゆる発展とか、成長とかそういう観念が一般化したのは産業革命期以降である。それまでのヨーロッパ時間というのは水平移行か、あるいはゆるやかな波を描いているか、とにかく右肩上りではない。社会が右肩上がりでないといけないというイデオロギー、発展イデオロギーが出て来たのは産業革命を契機にしてである。今の角山さんの東南アジアの神々への怖れからどうして近代が出てくるのかという質問自体が、ヨーロッパイデオロギーの立場からの質問であって、高谷さんがお答えになる必要はぜんぜんないと思う。

木村　私は渡辺さんに反論がある。私はインドをやっていて、近代においてはやはりある程度近代化しないと近代の一番ひどいところを全部引き受ける。そうしたしくみがあると考えている。ヨーロッパとか、日本とかそういう社会に住んでいると近代に対して、アットホームなところからクリティカルになりうるのだが、第三世界、特にアフリカなんかを見てくると、何がなんでもある程度近代化していかないとどうしょうもないという感にとらわれるのではないか。近代世界システムという言葉を私はきらいだが、近代資本主義というのはやはり非常に強力なダイナミズムを秘めたもので、好むと好まざるとにかかわらずそれに対応しないと社会は大変になる。これは私の実感である。

坪内　照葉樹林帯と熱帯雨林の島の森林はかなり違う。梅棹理論の正しさ、歪みはおそらく照葉樹林、日本というのをつないで、照葉樹林という外に向かって開かない、線で持ってつながるところを持って議論されたところであろう。現在では照葉樹林は内向的にしかいけないような、それでしか残せないようなところを、近代化という事は確かに問題であるが、そこに一つのそこから何ができるかという発想にいくところが、発想的にあるように思う。そうではなくて、東南アジアの森林はむしろ海に開いた森林の部分で、ものをみなければならない。全く海と森がくっついているというのが大きな条件なのだというところで、別の発展形態、これは発展、近代化というとややこしい問題になるが、別の展開というのはその場から生まれるのであって、照葉樹林からは生まれるものではないんじゃないかという気がする。

松原　確かに、ヨーロッパの産業革命は燃料

革命であったというのは、ひとつの解釈として十分成立する。ところが、地球上を見るといっぱい同じことが起こっている。西アジアでも、トルコでも木を切り尽くしている。だけど、産業革命は起こらない。これはどこの地域でもそうである。アフリカでもそうだ。やはり、そこのところで何故ヨーロッパだけが、という事の解釈が必要となる。なぜ、そこでヨーロッパは燃料革命としての産業革命というところへ結び付いたのか？そこでヨーロッパというものを説明していく原理が必要だと思う。おそらくヨーロッパの原理がそこにあるのだろうと思う。これとつながるが、ヨーロッパはキリスト教世界と直結しているという解釈が提示されることが多い。もちろんさきほどの話のように１２~１３世紀以降徐々に広がっていくのだが、イスラーム世界という場合には、何も西アジア、聖地をイメージしているわけではなく、インドネシア、アメリカも入ってくる。ところが、キリスト教世界の場合はすぐにこれをヨーロッパと結び付ける。だけれども、これも起源的にみれば、ヨーロッパでも何でもあらへん、わけである。そこがきれいさっぱり切り落とされる。ヨーロッパの場合はセグリゲーションというか、ピューリフィケーションというか、全て純粋化していった時には我が方にあり、という考え、大変アグレッシブなミッションというものを伴った形で、外へ攻撃的に出ていった。ここがやはり問題である。キリスト教世界と言えば、当然ロシア正教も入ってくる。他の派もあり、キリスト教世界というと非常に大きなイメージが私など当然起こってくる。ところが、多くの場合、ヨーッロッパの連中が主張する場合にはヨーロッパ精神の基本だという。全てを自分達でやったやったという主張がやはりおかしい。ヨーロッパのおかしさは、全てピューリファイしていって、ヨーロッパこそすべて、ここに全てのもとがある、という。そのヨーロッパ文明というのも実はギリシャ・ローマ文明だといいながら、現在の時点から逆に歴史を解釈してしまう。そこが、おかしさだと思う。しかし、そこをヨーロッパの人は最終的には気付きたいとも思わない。自分の主張を曲げようとは思わないだろう。私自身ヨーロッパ自体を攻撃する必要は何もないと思うが、この点は重要だ。特に、高谷さんがだしている東南アジアを深く研究していくという方法はやはりある意味で大切だと思う。ヨーロッパの猛々しさを相対化し、ちゃんと位置付ける作業だろうと思うからである。私自身地域研究に関わって来た、近代の問題というのは世界的に大きな問題で、これは近代という事を其々の地域の中で、どう捉えていくか、近代化イクオール、ヨーロッパ化とかそういう視点では捉えられないと思

う。段階論的な発展というのは思想の一つであり、原理が違うと段階論的な発展とは全然違う筋道、歴史の筋道を考える人達はたくさんいると思う。問題はむしろそれをわかるような形で、紹介していく必要があると思う。東南アジアの場合、３０年ぐらい頑張ってやって来て、ようやく説明ができるようになってきたと私は思っている。ただ、言葉使いがすれ違っていて、表現の形態が違っていて、なかなかうまく了解してもらえない、意思が伝わらない、そういうことになっているのではなかろうか。私は議論は非常に結構なことで、それは続けなければならない。お互いに攻撃的になる事はないだろうというふうに思う。

渡辺　結局、近代というものをどういうふうに理解するかということに関わってくるが、ここではさておくとして、なんらかの形で近代化しないとやはり一番悲惨な目に遭わざるをえないのは後進国だろうと、木村さんはおっしゃった。それはおっしゃるとおり。たしかに、非ヨーロッパ世界がどのような対応をヨーロッパに対してしたかというときに、日本の対応がある。日本は幸か不幸か、第二のヨーロッパになろうとし、それに相当程度成功し、場合によれば、ヨーロッパ以上にヨーロッパ的になった。その挙げ句、得たものは大きいが、失ったものも大きい。ヨーロッパに対抗せざるをえない、これは事実であるが、その対抗の仕方として日本的な近代化があった。だが、これが唯一のあり方だろうか。それから、地球全体の立場からしても、望ましいあり方だろうか。ヨーロッパに対抗しなければ、結局はばばを掴まされる。しかし、ヨーロッパに対抗するために、ヨーロッパ的になるという形での対抗の仕方しかないのか、そこのところが、いわゆる非ヨーロッパ世界が近代化というものに直面した時の大きな厄介な問題だと思う。私は木村さんがおっしゃった事はよくわかる。日本にはこれ以外に選択肢がなかったであろうとも思っている。日本がこの道を歩んだのは必然だったと言うことさえできる。しかし、日本が歩んだ後を、東南アジアが歩む必要もないのではないかと考えている。もう一つ別の東南アジア的な歩み方があるかもしれない。それが、結果的に言えば、何らかの意味での東南アジア的な「近代化」と言われるべきものになるのかもしれない。近代というヨーロッパの中で生まれてきた範疇、概念をわざわざ使う必要はないだろうというのが、私の立場である。

永沼　渡辺先生のおっしゃるとおりだが、東南アジアをはじめとして、発展途上国といわれる国々からみた場合、その論理というのが、先進工業国の身勝手に捉えられる部分がある。というのは結局、我々がエネルギー多消費型

文明というものを享受しながら、他方で我々の後を追っても、真の意味での豊かな社会にはならないと言ったところで、それは結局地球的規模でのエネルギー消費というものを一部の地域だけで、享受するというシステムを続けるということになってしまう。その場合、先進工業国側が、どう自分達の社会なり文明を作り変えていくか、ということがないと、ヨーロッパ型の近代化というのを望ましくないとは決して言い難いのではないか。

渡辺　私なりにその問題を考えているつもりである。参考資料としてお配りした３つの類型の対比も、その問題を考えていくための自分なりの手掛かりとして試みた。ただ、今の時点で、いわゆる先進国の側から積極的な提言がなくて、ただ我々の道を歩まないようにといったって始まらない、といわれればそれまで。つまり発展途上国の発展をどういうふうに考えるかというときに必ず出てくる、厄介な問題である。それは私もわかっているつもりだが、ただ、木村さんがあのように御批判くださったので、一言ああゆう形で答えたという事である。もう一つ、松原さんのコメントで非常におもしろいと思ったのは、イエスはユダヤ人であり、いわゆるヨーロッパ人ではない。キリスト教は非ヨーロッパ世界で生まれたものであると言われた点。これをヨーロッパ社会の根本的な原理にするという事は、ある意味では、北ヨーロッパでは綿毛一本だにとれない綿がヨーロッパの産業革命の原料基盤になったという事とどこか似ている。キリスト教がまさにヨーロッパの宗教なのだという自己正当化のひとつの手段として、いわゆる「ユダヤ人の問題」があると考えられよう。すなわち、ユダヤ人迫害というのは、実はユダヤの社会で生まれたキリスト教、これがヨーロッパの宗教なのだと自己を納得させるための手段とし行われてきたのではないか。私はユダヤ人問題というのは、イエスがドイツ人でも、フランス人でも、ゲルマン人でもなくて、ユダヤ人であったがために、構造的に続いていると見ている。これが私の理解である。

川勝　ヨーロッパに対する外からのインパクトが、いかに大きかったかという事を表している。今の話と関連させたいと思うが、生態と近代化との関係についての議論である。高谷理論からはいわゆる近代化は出てこない。もっとも近代化を考える必要があるかどうかは問題だ。しかし、ヨーロッパにおこった近代化は、考えざるをえない。これが人類史における農業革命に次ぐ第２の画期かどうかは別にしても、その地理的にはわずか３％のところが、１８００年ぐらいにすでに３３％、今世紀始めには８４～８５％という地域を支配下におさめた。こうして他の地域に決定的

な影響を及ぼした。これはなぜおこったのかという事は、全地球的な問題だと思う。その説明体系として、ヨーロッパ人はみずからの説明で押して来た。プロテスタンティズムの倫理で勤勉に生産に従事して階級闘争でブルジョワジーが社会を作ったという議論だ。ヨーロッパでも日本でもそういう説明を我々はされてきた。それに対して角山さんはエネルギー革命という生態的観点から説明をされたのは画期的だった。それは１９６０年代ではなかったかと思うが、まだ、安保闘争の頃で、本屋にはマル経の本がたくさんあった時に、全く異質な説明の仕方であったと思う。燃料が枯渇して、石炭に変わる、その時生態を壊した。自己の生態を壊さざるをえないほどの危機があった。危機は内的危機だ。生態系が変わった。森林がどんどんなくなった。したがって、石炭に変えた。なぜ木を伐ったのか。木は燃やした。その時に、応地さんの御説明の中で、熱帯はいろんなものがあるが、少量だと、そして植生が豊かであると。渡辺さんが指摘されたように、そこは北欧の植物学者らにとっては、驚異の世界であった。美しい花が咲く。色とりどりの花が咲く。これがもたらした色彩的なインパクトは着ているものに現れるのだが、ものすごいものであったと思う。東方の海からもたらされてくる物のほとんどが実は熱帯産のもので、太陽のエネルギーをいっぱい持っている。それを今度作ろうと思ったら、自分のところにある太陽のエネルギーで生まれた生物を全部燃やしてもなお足らないというくらいの燃料を燃やさないと１本の糸もつむげない。機械でしなければならない。遠いところから船で運んで鉄道で運ばなければならない。コストがかかるので、人間まで商品として使わなければならない。ことほどさように熱帯の持っている自然の恵みとしてあるエネルギーの蓄積に匹敵するエネルギーを、人為的に短期間の間に燃やした。生態的転換をせざるをえないくらい、外からの、いわば東南アジア的生態の実に穏やかな人間がほとんど作為を加えない、人間の数が少なく、植生の豊かな、その生態のもたらしたインパクトが大きかった。意図せざるエネルギーを、エネルギー圧をヨーロッパの人達は受けて、最初はそれに感化され、憧れたけれども、やがて自分で作ることになれば、自分のところの生態を全部燃やしても、なお足らなくて、新大陸に行って、新大陸の生態を切り倒し、そのことを善とし、「フロンティア開拓」は善であるというようにした。それゆえ、生態的な転換としての、そしてエネルギー革命としての産業革命というのは、実は熱帯からもたらされてきたエネルギーに対するレスポンスであったのではないか。それは実は燃やした量だけのエネルギーを熱帯から

受け取ったのだと解釈したらどうだろうか。

応地　今熱帯からのインパクトの大きさを語られたが、その中でこれは量的な話になるが、インドのことがある。インド綿がイギリスで流行って、その頃輸出された綿製品が幾つかアーメダバードの博物館の中に並んでいる。今おっしゃったように、確かに色鮮やかに並んでいる。そういうことを見ると、私は東南アジアよりもインドのインパクトの方が大きかったような気がしている。いかがですか、そのあたり。

川勝　複合的だ。インドはインドだけとして存在するのではなく、インド、東南アジア、東アフリカ、この一つのインド洋世界の中の製品として木綿があって、木綿でもアーメダバードのようなグジャラートにあるのは東アフリカ、中東に運ばれ、ベンガルの木綿は東南アジアに運ばれ、そこから香辛料、胡椒を買っており、そこにネットワークがあった。そのネットワークにヨーロッパ人が入り込んだ。東南アジア、インド、東アフリカが一つの世界、環インド洋世界を作っていたと思う。インド木綿は環インド洋圏の構成要素、いわば文化・物産複合、インド洋圏的 products complex の一つの構成要素だ。持って帰った物は恣意的で、最初は胡椒、香辛料、宝石、コーヒー、砂糖、陶磁器だとかである。ちなみに陶磁器にしても、燃やさないと出来ない。陶磁器生産も含めて、燃やしに燃やしたという感じがヨーロッパの近代化過程にはある。

角山　木材の用途だが、燃料用にはもちろんきわめて大きかった。さらに住宅もあったが、一番大きかった用途は船、これは国防上非常に重要でわざわざそのためにチューダー朝時代には造船用木材が指定され、伐木を禁止する措置がとられていた。また、鉄鉱石融解のための燃料がものすごくいった。石炭に代えても、なかなか高い温度にならないので後までかなり木炭が用いられていた。それが最後まで残ったのがスエーデンの鉄で、木炭で作った鉄が、ものすごく優秀だった。ビール、ガラスの製造など、とにかく石炭が大量に使われた。これは工業化の最初の過程だと思うが、イギリスでは１８世紀産業革命の前提条件が１６~１７世紀にかけてできた。これをイギリス経済史ではアメリカの経済史家ネフのタームを用いて「初期産業革命」と呼んでいる。松原さんがおっしゃったように、森林がなくなるのは何もイギリスだけではない。森林がなくなっている例は過去にいっぱいある。なぜイギリスだけが？おっしゃるとおりだ。一番古い中国では、１２世紀宋の時代、薪炭燃料から石炭に変わっている。しかし、一度石炭に変わったけれども、また森林に戻っている。そういう例は、ヨーロッパ大陸でも、ドイツも含めデンマーク、フィンランド

などでも、一時的部分的におきた。しかし、こうした所では石炭に変わるといっても持続的に石炭になったわけではない。イギリスだけが不可逆的に石炭への転換を進めており、１７世紀の終わりを取って見ると、イギリスの石炭の生産量は約３００万トンで、全ヨーロッパの生産量をはるかにうわまわっていた。石炭は薪炭と違って化石燃料で再生が効かない。リサイクルを断ち切るような、人類史始まって以来始めての環境破壊につながるようなそういう現象がここで起こってきた。イギリスだけが再び木炭にかえらなかった。１７世紀末にはイギリスだけが突出して石炭に依存するという社会状況が出てきたのである。その中でいろいろな社会的技術的課題が発生してきた。例えば、炭坑から地下水を排水するのにどうするか、カサ高く重い石炭を運搬するのにどうするべきか、こうした問題を解決する為に便利で効率的な方法が求められた。道路を改修するとか、運河を掘るなどして、石炭の効率的な運搬を考えた。はじめは馬を使っていたが、大量に運ぶために船を使った。そのために水路をつくり、運河を掘った。社会的技術的課題を解決していく中で、どういう社会を作っていったかというと、効率的で便利な、そして機能的な社会を生みだしたのである。馬より船が便利、同じように、人力や風力で動く船より蒸気力で動く船のほうが便利というわけである。これが産業革命である。こういうものがアジア的 product complex と違う範疇として出てきた。それは人類史においてすごく新しい。つまり、物産複合といわれる時は例えば、東南アジアのどこそこに、砂糖があるとか、お茶があるとかいうふうな、そういうことだった。さきほど渡辺さんがおっしゃったような物産。これは１９世紀だが、川勝さんは１８世紀だったらもっと東南アジアの物産が多かったはずだと言われた。ヨーロッパ人はこれらを求めて大探検航海に出かけた。まず１６世紀から１７世紀初めにかけてコーヒー、ココア、お茶を発見し、そしてさらにもっと有用な植物が次から次へと発見されていく。１８世紀中頃以降だと、大洋の航海に必ずのせていったのが、植物学者であった。キャプテンクックが太平洋を探検して、オーストラリア、ニュージーランド、南太平洋の島々などを発見した。第２回の航海（１７７２年－１７７５年）にはイギリスの代表的な植物学者バンクスを連れていった。１７７５年日本に来たツンベルクは植物学者で、スウェーデンのウプサラ大学のリンネによって派遣されて来た。世界中の未知の大陸、島にどういう有用な植物があるかを調査している。１８世紀の終り頃最大の問題になったのが、パンの木である。これはタヒチ島に実際なっていた。これを西インド

諸島に移植栽培して、西インド諸島のプランテーションの労働力である奴隷の食糧に供しようと計画した。今までは小麦粉パンなどを食糧としてあてていたが、天然になっているパンの木があれば、これの方がよい。どんどん栽培してこの実を食べさせたらコストが安上がりである、と考えられた。その探検船バウンティ号がハイジャックされたのが、映画にもなった「バウンティ号の叛乱」である。ところで、移植する前に実験する施設が植物園であった。植物園というのは現代でいう企業・大学の研究室と同じで、科学のセンターだった。この当時の科学というのは、中心は博物学である。したがって、博物学の中で一番重要な有用植物をどこの国が、先に発見するかということが、最大の問題であった。ついに日本までお茶の種子苗を入手するために来たのがシーボルトである。

１８世紀の科学の最先端の発見といっても、当時はまだ天然の物産の発見であった。ところが、産業革命は新しい運搬手段、機械、エネルギーの発明によって、それ以前の時代と根本的に異なる。これが、近代物質文明のもとになっている。この近代的なものは、どこが違うかというと、それ以前のものは商品ではない。半分商品であるが。しかし多くは奢侈品である。ということは王侯貴族しか使用できない。絹の衣服は庶民の使えないものであった。身分的、階級的に、使用が制限されていた。ところが、この近代的なものは商品として作られる。脱階級性、脱民族性を持っており、階級を越え、民族を越えて利用に供された。便宜性という点では、価値中立的である。近代化を代表する鉄道、通信は誰でも使える。さらに、たとえばマッチにしても、誰だって欲しがる商品である。手に入るかどうか、要はお金があるかないかだけである。そういうものがアジアに入って来た時に、どういうレスポンスをしたか。当初、ヨーロッパ産のマッチは高価でアジアの一般の貧しい人々には手に入り難いものであった。マッチ軸も１本２本ずつで買っていた。これは領事報告に載っている。そのマッチを日本は、私は「変電所」と言っているが、欧米製品をまねして見ただけですぐ作った。主に大阪や神戸の零細家内工業であったが、その人達が作った。そして大陸の貧しい人でも箱で買える値段で売り出した。もちろん日本のマッチは１０本のうち１本か２本はつかないのがあったが。こうして真似が上手な日本人は安いマッチを持って、大陸市場に進出していった。日本の国内はもちろん、朝鮮、中国など大陸市場へ向かい、ヨーロッパ製品を追い出した。追い出されたほうは面白くない。ここに国際摩擦が起こった。ガラスなどもマッチと同じ過程をへて日本製品が大陸市場へ進出した。

こうして、発明されて出てくるものが価値中立的、そして便宜性、効率性という性格を備えた新しい商品である。これが近代を特色付けるものと考える。

アジアがこれにどう対応したか？アジアだけでなく、他の地域がどう対応したか？ただ日本だけがこれを真似て作った唯一の国である。真似が上手な日本にオリジナリティがないといわれる。確かにそうかもしれないが、誰でも作れるのであれば、誰でも真似したはず。しかし、不思議なことに世界広しと言えども、ちゃんと真似したのは非ヨーロッパ世界で日本だけである。それは同じく第二次世界大戦後の日本経済の復興もトランジスタラジオから始まった。アメリカの新聞ひとつで日本の技術者が、半導体、いやトランジスターを作った。この作ったトランジスターをいったい誰がトランジスターラジオに使うと予想しただろうか。ヨーロッパ、アメリカの人たちには、全然そういう発想がなかった。それを日本のソニーがはじめて真空管のかわりにラジオに使った。この点が私は日本のまねは単なるまねではなくて、やはり独創がはいっていると思う。私は日本の近代の発展を特色づけるものはここだと思う。トランジスターから続いて、セイコーのクォーツもそう。それ以外にも数え上げればきりがない。私はそれが日本の近代の対応のしかた、つまり、ヨーロッパの近代物質文明に対する対応のしかた、日本のユニークさだと思っている。私はこれを「日本変電所」、発電ではなくて変電所であると考えている。単にそこを通って分配させるというのでは配電所だが、私は配電所ではなくて、「変電所」であるといいたい。変電所というのは、高圧をマイルドな電圧に変えるというところが重要で、そういう意味で、私は「日本変電所論」という考え方を主張している。私は日本がアジアの第二次世界大戦後の経済復興の火付け役を果したと考えている。日本が火付け役になっただけではなく、ＮＩＣＳといわれる段階をへて、今、ＡＳＥＡＮにひろがってきているのである。これからの問題は日本に続く「変電所」が出るのか、オリジナリティーが出るのか、つまり、韓国であれ、ＮＩＥＳであれ、現在は日本の配電所になっているわけで、その点が先ほどおっしゃったように、アジアがこれからどうなるかということである。そういうオリジナリティーが東南アジアあるいはアジアに果たしてあるのかどうか、というところが、これからの経済問題、成長のゆく先を占う鍵になるのではないか、と思う。

司会・家島　時間が十分にあれば、今の近代化論を東南アジアにも照射していろいろ考えてみたらおもしろいし、また十分に議論になると思うが、残りの時間は後４５分しかな

いので、私の希望も一ついわせていただきたい。今、木材というところで、「船」という問題がでてきたが、一歩進めて、「海」という問題にも触れてもらいたかった。川勝さんは最初の問題提起の中で、「海洋史観」を語られて、ヨーロッパを変えていく要因、つまり外からのインパクトを考える場合、「海」というものを見逃しえないということで、議論を展開された。ヨーロッパと海。そして、東南アジアと海域、両者の比較の材料として、同じ「海」との関わりを持ちながら、どうして両者に違いがでてきたのか。その辺を少し議論していただいて、最後にやはり未来像、つまり、先ほど横道にそれてしまったが、「森がなくなった後の東南アジア像」というところを議論しなければならないと思う。その二つの点についていかがでしょうか。

ヨーロッパの台頭

川勝　角山さんの壮大な近代化論を聞いて、そこをうける形で話を進めたい。近代の特徴をマルクスは資本主義的生産様式が支配的な社会の富は巨大な商品集積として現れるといった。これは資本論の有名な冒頭の一節だが、それぞれのひとつひとつの原基形態は商品一個だとして、商品の分析から始める。商品は価値と使用価値からなるとして、議論を展開した。つまり巨大な商品集積からなる、と彼は言ったわけだ。彼は 1869 年にこれを出すわけだが、それより 300 年前だと、角山さんのいわれる便利性、脱宗教、脱民族、そうしたものはない。皆、宗教性とか、民族性とか、文化性を、付着したもので、しかも全部自然の中にディスカバーできる、そういうプロダクト・ミックスであった。だから、農産品中心の自然生態系から加工されたもの、目に見える植物から加工されたものが鉱物をベースにしたものに変わった。こういう大転換が起こったということである。私はそういう大転換として、イギリスを中心とした近代化過程をみるという見方がいいと思う。その方が生産的だと思う。ところで、何が一体その転換を可能にさせたのか、また、最初になぜイギリスでそれが起こったのかということを考えると、私は家島さんのなさっているダウ船の世界、インド洋海洋文明が重要だと思う。これのインパクトが大きい。中世的な物産複合から近代的な商品複合へと、マルクス的にいえば、本源的蓄積期といわれる時期だが、これが 1800 年前後に起こっている。これを境にしてそれ以降を近代というと非常にわかりやすいと思う。ドイツはゲーテとか、ベートーベンとか、モーツァルトとか、あるいはカントとか、ヘーゲルとかがでて、いわゆる文化革命を遂げるし、フランスは政治革命を遂げるし、イギリスは産業革命を遂げるという

ことで、西ヨーロッパが、文化・政治・経済において大転換を遂げて、近代が生まれた。そこで量的にも他の地域でつくられている物よりもたくさん作り、価格が安くなる。それによって、段階という考え方が出てきて進歩主義もでてくる。だから、それ以前と以後はやはり全く違う。その 1800 年に至る以前、大体ルネッサンス、ないし宗教改革から見て、1500 年から 1800 年の期間を移行期、普通はこれを本源的蓄積というが、さしあたって「近世」というふうにいうと、この近世 300 年間にアジアの海洋地域、インド洋をめぐる周辺地域でつくられている物産の複合が総体としてヨーロッパにインパクトを与えた。イギリスは、それと同じものを大西洋をまたにかけて作った。大西洋をまたにかけて作ったときの作り方が、いかに巨大で、いかに生態系を破壊するものであったのか、ということを、角山さんは人類史上始まって以来のインベンションとおっしゃった。まず化石燃料を燃やした。それを加工して機械を作った。それで東南アジアでは天然に作られているものを人為的につくっていった。あるいはそれを作るための生産手段自体が、たとえばレールあるいは機械それ自体が自己目的化して、別の用途を生み出していくということで、波及効果的に違う物産がどんどん作られた。たとえば、鉄道の場合でも、最初はこれは貨物用だった。貨物用にリバプール・マンチェスター線が作られた。ところがそれを見たら、人が動けるではないかというわけで、100 万人が見に来て、ひとりがひき殺されたりするんだが、ともあれ、乗る方がおもろい、ということで、人を運ぶ手段に変わった。ということで、違う用途に波及したのだ。その 300 年間に起こった環インド洋圏の文明の、旧世界の文明のインパクトは極めて大きかった。そうすると、これは、梅棹さんのいわゆるオートジェニックな、自生的な遷移を遂げて、サクセッションを遂げて、近代化にいたった、というのとは違う。大変な危機をヨーロッパは味わったとみるべきである。この危機は人類史を変えるくらいの危機であった。なるほど中国も、宋の時代には元というような、乾燥地帯の圧力を被って、王朝がかわった。ある意味でヨーロッパの場合もこれと同じである。しかし、ヨーロッパが被った変化の震源地は海域世界であり、熱帯地域にあった。あるいは自然の恵みの中で作られていたものを、今度は人為的に非常に寒いところでつくろうとしたときに起った。人為的に人が考えもしなかったものを燃やすというエネルギー革命として起こった。その海域的インパクトというものを考えないと、近代はわからない。そうすると、やはり、これまでの説明体系では充分ではない。陸地の中で新しい階級がでてくるとか、

新しいエートスをもった人々がでてきて勤勉実直に働いて云々といった話、これはいままで人類史の基本法則といわれたわけだが、そんなチマチマした話ではないということになる。もっとでっかいインパクトとして海域世界というものを考えざるをえない。そんなことは全然考えないで書かれたであろう高谷生態史観の図、ここには時間軸は入ってないが、この図の「インド洋海域世界」と「東南アジア海域世界」にあった物の世界がいかに豊かであったのか、いかにそれが植物学者をはじめとしてヨーロッパの民衆一般を、上は貴顕から下は庶民に至るまで、この海域世界で使われていたものがいかに人々を魅了したか、それを考えざるをえない。そうした豊かな地域の物産を人々は船で運んだ。船をつくるのにまた木を切るということで、結局、自己の生態を食いつぶすほど、自己の墓穴を掘るほど、自己の生態系を根本的に変えてしまわなければならないほどに、この環インド洋文明圏のインパクトは大きかった。それは自ら招いたインパクトであったといえると思う。

角山　近代化の話をしたが、その裏に忘られているのは非人道的な行為だ。つまり奴隷労働力を駆使して、アジア物産をつくるというのが、大西洋経済圏の性格だった。ここのなかには奴隷貿易という非人道的なトレードが構造的にはいっている。そのことが西洋文明・物質文明の裏にある一つの決定的に大きな問題だ。この問題がやがてはインド・東南アジアに、そして全世界に広がっていった。つまり、奴隷解放の次には奴隷に代わって非人道的な半奴隷的な移民労働力を今度は東南アジア、中国、あるいはインド、日本さえもまきこんで創出し、それらチープ・レーバーを欧米先進国が形成するアジア・太平洋経済圏に提供したのである。物質文明は生活を便利にする一方で人類史における非常に悲惨な側面を形づくることになった。環境問題だけが物質文明の裏の面として問題になっているが、その物質文明が発展する中で、深刻な人権問題が起こっていることに注目すべきであろう。たとえば、イギリス国内で、マンチェスターでおこった産業革命の裏に綿工業の原料である綿花をつくっていたのは奴隷だということ、綿工業がイギリスからアメリカに広がるなかで、奴隷を再生産し拡大していったということ、またインド、中国、日本も含め戦前のアジアから半奴隷的な移民がどれだけ大量に中南米、豪州、ハワイなどのプランテーション、鉱山労働に狩り出されたことか。その所得の低い悲惨なアジア民衆・農民の暮らしはこうして１９世紀中頃以降急速に生まれてきたものである。だから、私は環境問題とならんで人権問題が近代物質文明の裏に潜んでいると考えている。

川勝　奴隷貿易がコーヒー、たばこ、砂糖、綿花の生産・貿易とリンクして拡大していくわけだが、一等最初は金銀を掘るということだった。鉱物であった。その鉱物を大西洋を運んで、環インド洋圏に運んだ。いいかえると、西ヨーロッパにひろがっていた生活様式、中世的な生活様式を構成するもので、交換に提供できるものがなかった。それぐらいヨーロッパは貧しかった。つまり、中世的な物産複合を構成するいろいろな物があるわけだが、その中で商品として売りにたえる物が何もない。したがって、金と銀という鉱物を持っていかざるをえなかった。それは一方における生態系の豊穣さと、これはインド洋であるわけだが、他方における貧しさとの違いである。ヨーロッパが持っていたのは木だけだった。その木で船をつくった。後は暴力的に人々をこき使って、金銀を運んで、それを持って、向こうの物を持ってかえってくる。その延長線上に鉱物をベースにした近代物質文明というものがつくられていく。ただそれもやはり生態系的な比較の中で２つの全く異なる生態系の中に生きている人々が出くわしたときに、その生活にあこがれるところから来ている。熱帯での生活をしたいとは思わないが、そこで使われている物は欲しい。だから、生態それ自体というよりもプロダクツ・コンプレックスを持ってかえってこよう。そう考え、そのとおり行動したのだ。そこに視点をあてて論じることができるのではないか。つまり、船で運ばれた物は生態それ自体ではなくて、そこからでてきた産物なわけで、その時にダウ船の役割とか、東インド会社の船の役割が、あらためてクローズアップされてくる。いわばそれしか作れないという木の文化、そしてついには木がなくなって石の文化にかわってしまう。われわれはその結果としてヨーロッパを石造りの文明としてみているが、実際はそれは木を切りつくして、後は石しかなくなったということであろう。寒いところで石造りというのは、ある意味では合わない。暑いところは石づくり、寒いところはむしろ木造りでなければならないと思うが、そうはなっていない。なぜ、ドイツやイギリスで、石造り・煉瓦造りなのか、というと、これは、木がなくなったからだという逆説もでてくると思う。

司会・家島　角山先生の話と、川勝さんの話とはつながっており、さらに近代化論もこれにつながっているので、議論はうまい方向に進んでいると思う。私はインド洋のダウ船貿易を文献史料と現地調査の両方から研究している。現在も三角帆を装備した木造帆船・ダウ船がアラビア海を中心としてかなり広域的に動いている。そのダウ船の実際の交易構造というか交流関係を調査している。勿論、

ダウによる交流は遠い過去から、さまざまな時代と社会的・経済的・政治的要因の中で変化・変容してきた姿が現在あるわけで、そのままの交易構造が過去にあてはまるとは限らない。しかし、同じような構造が非常に広域的にインド洋周辺部にひろがって、それが現存しているということも事実である。インド海域世界というものは、非常に長い歴史的持続性をもって展開しているのだが、これは簡単にいえば、インド洋周辺部の多様で豊かな生態系の違いを最大限に利用してそれを補完・交換する関係を非常にうまく作っていたからである。補完・共生の交流システムができていて、交流が他を支配・搾取するという形ではなく、自然・生態・生産関係、人・もの・情報すべて、常に自と他が充と欠を補完する形で、存在してきた。このことが持続性を支えてきたのだと私は捉えている。一方、ヨーロッパは人為的に他世界を改変してヨーロッパに都合のいいもの、ヨーロッパだけが富を独占する形でシステムを組み直した。そこで、ヨーロッパ的な物質文明のイミテーション化が起った。現在、東南アジアで進行しつつある近代化もこれと同じである。そこではやはり有限の資源をこれからどう使っていくかが問題である。いままでのシステムではとてもこれは維持できない。地球資源の限界がある。このことを最後に議論して東南アジアの未来像の問題につなげていきたいのだが。

永沼　その前にひとつ、川勝先生の議論に関してだが、川勝先生はヨーロッパのインド洋における物産複合の出会いをかなり衝撃的なものとして描いているわけだが、実際アジアの物産をヨーロッパの中に取り込んで、ヨーロッパの森林資源を枯渇させるまでにエネルギーをつかってまでそれを自分たちでつくりだすにいたるまでにはかなりタイム・ラグがある。そのタイム・ラグをどう理解するのかという点に関してもう一つ説明すべき要素がいるだろうし、それから、ポルトガルのインド洋での出会いの衝撃性をあまり強調しすぎるのもどうか。というのは、インド洋にはインド洋の固有の通商網が、家島先生の研究でわかるように、できあがっている。それと地中海の通商網が地理的に近いこともあって接触している。そこを通して、インド洋の物産はかなりヨーロッパに流れ込んできていた。綿製品にしてもかなり以前から入ってきている。また、ナイル河口や、キプロスの綿花がイタリアに運ばれて、綿工業も比較的小規模だが早い時期に生じている。ヨーロッパ人がアジアの物産に対して、それほど衝撃的な出会いをしたとは思えない。ただ、ある時期から、ヨーロッパのマーケットの中で急激な需要の高まりが生じてきた。１７世紀終りくらいから、異常なまでの需要の高まりが生じて

きたのは一体なぜか。そこにもうひとつ説明要因として加えておかないと、物産との出会いだけで説明するのは不十分ではないか。むしろ、社会構造の変化によってもたらされた消費構造の変化の方を考慮すべきではないかと考えている。

角山　イギリス経済史ではっきりしていることは、中世はご存じように奢侈禁止令がでていた。だから一般庶民は特定のもの以外は禁止になって、王侯貴族以外使えない。しかし、ヨーロッパの中でその奢侈禁止令がいちばん最初に廃止されたのがイギリスだ。１６０４年である。今まではマルクス主義では１６４０年から６０年のクロムウェル革命を市民革命として、それから近代化に進んだというが、そうではない。「モノ」の立場から、商品の立場から見ると、アジアからの最初の綿布は奢侈品だった。王侯貴族しか使えなかった。ところがその奢侈禁止令がイギリスの場合は１６０４年にすでに解除された。これ以降もうほんとに召し使いでもたばこも自由に買えた。そういう消費社会があったということが最近の研究で明らかになった。僕はこの点が今おっしゃるような需要が増大したということの一つの説明になると思う。

川勝　それに付け加える形で、これは渡辺さんの企業家的消費者というコンセプトをちょっとお借りしたい。企業家というのは普通生産者に使うのだが、イギリスがビートルズを生み出すような国柄とも関係しているかもしれないが、非常に新しもの好きで、１７世紀初めに奢侈禁止令をやめたことを強調しておきたい。ただ永沼さんのいわれることももっともなお話である。私は環インド洋圏から直接向こうにいったような言い方をしたが、実際は永沼さんのいわれたとおりである。その原型は実は中東アラブを中心にしたレバント地域、つまりシリアやレバノンの辺りで起こったいわゆるアラブ農業革命だ。ワトソンの研究ではだいたい９００年から１１００年の間にアラブ世界に緑の革命がおこったとされている。カナートをつかって百般の物を移植した。どこの物を移植したかというと、東南アジア、インドのものだ。砂糖がそうだし、綿花もそうだ。その他いろんな果物や野菜がはじめて作られて、その作り方の農書もでている。こうしたものはヴェネチア、ジェノバを窓口にしてヨーロッパへ入った。綿もしたがって中世末から知られていた。それがひとつのクッションになって、紹介されていく。コーヒーの飲みかたも綿を着るということもそう、下着を身につける、胡椒・香辛料を使って料理をすることもそうだ。中東といっても単に砂漠で運んでいるだけではなく、そこに１３００年くらい、ちょうど中国の宋の時代ですね、この時代に大生産革命とも称すべ

きグリーン・レボリューションがおこった。これがプロトタイプとなっている。したがって、もとはといえば、中東の人たちから指南書を農書という形で得ている。それがイギリスに伝わるのが１６世紀末くらい、つまり３００年か４００年かかっているわけだが、そしてスコットランドに１７－１８世紀に農書がさらに伝わっていく。ルネッサンスがだんだん北上していくのと同じように北上していったのである。そしてそれを大西洋をまたにかけて、アメリカに移植し、まったく新しい作り方としてプランテーションというのをあみだしてつくるということになる。ともかく、アジアでいっきに衝撃に出会ったというのは誇張がある。しかし、出会ったときの驚きはあったと思う。中東を媒介をするのではなく、ムガール帝国とか、クローブやナツメグがなる島を見たときの彼らの驚き、マラッカ王国を中心にした物産の豊富さに接したときの驚愕はまちがいなくあっただろう、ということも申し上げておきたい。

坪内　ヨーロッパの成立がよくわかって、東南アジアとの関係が随分勉強になった。先ほどの豊かさにもどるが、東南アジアから豊かさが引き出されていった。結局ヨーロッパにおける不足の要素を東南アジアから引き出していったというふうに考えればよさそうである。そうすると関わりはヨーロッパからの、一方的な東南アジアへの関わりだったと解してもいいのか。もう一つ貧しいヨーロッパというのは、あるものが足りないという部分的な欠損がヨーロッパの欠損の基本部分であって、それをヨーロッパは要求するだけ、豊かさがあったんだという解釈でよろしいのだろうか。

あこがれのオリエント

渡辺　私は、新しい文物に接したとき、特にちがった文化圏から渡来した舶来のものに接したときに、それに対する欲望がどういう形でめざめるか、ということに非常に関心をもっているので、いろいろと考えたのだが、結局は好奇心の様だ。彼等が最初に求めるのは、贅沢品、つまり不要不急のものである。新しい欲望が生まれるきっかけの一つは確実に好奇心だ。だから、むしろ子どものほうが、企業家的消費者になれる。日本の企業はそれを徹底的に利用している。若い世代を攻略することによって、親を攻略する。その場合に、舶来品の原産地をはじめから自分たちよりも低い世界だと思っていたら、そこから新しいものがきても、好奇心の湧きようがないと思う。おそらく、われわれのように近代以降のヨーロッパにとっぷり浸かっている人間は、ヨーロッパ人が持っている非ヨーロッパ世界を見下す態度にいつのまにか馴染んでいるか

ら、昔からそうだったろうと思い込んでいるが、たぶんある時代まで、ヨーロッパ人にとってトルコの世界やアラビアの世界は本当に光輝く世界だったのではないか。もっとも広い意味でのオリエントも。そこから、後から後からもたらされるものを、一体そもそも何に使ってよいのか、わからない、どう使いこなして良いのかわからない。しかし、とにかく非常に文明の高いところからもたらされる光で、それに対する強烈な憧れがあり、ある意味では、非常に素直に、貪欲にそれを吸収しようとした。それをやがて輸入代替で自分たちでつくりだそうとした。ところが、それをつくる条件がない。そうすると人為的に条件をつくりだしていかなければならない。そこにある意味では大変な画期的な発展もあったし、画期的な破壊もあった。そういうことではないか。

角山　たとえば、アジア文明へのあこがれの一つは、木綿であり、砂糖であり、焼き物であり、お茶であった。そのあこがれの時期にたとえば、庭に中国風を真似てみたり、中国・アジアから入ってきた植物を庭に植えるとか、籐の椅子を使い、あるいはインドの物材でつくったものを部屋の置物にしたりした。そういうのを「シノワズリ」といった。イギリスではその「シノワズリ」を大体１８世紀のはじめ、１７１０から１７４０年くらいに設定しようとしようとしている。なるべくその影響を少なかったといいたいためにだんだんその時代範囲を狭くしつつあるが、しかし、１８世紀前半はわれわれがパリのブランドものにあこがれたと同じような、東洋の文明にあこがれた時代が厳然としてあった。これが、いつのまにか、アジア・中国蔑視に転換していく。これは私にいわしたら、１８世紀中頃以降、つまり産業革命がすでに進行しているなかで変わっていく。その前の１００年、５０年前はあこがれの中国であったのが、いつのまにか、中国はどうしようもない変化のない停滞社会だということになっていく。１８世紀のヨーロッパの思想状況には進歩ということが重要であった。啓蒙主義の中で進歩が強調され、それがアジア、特に中国にはその進歩がない、というふうな西洋優越思想ができた。西洋が文明であり、中国あるいはアジアは野蛮であるというふうな思想がその間に生まれ、これによって大転換がおきたのだ。

渡辺　アヘン戦争の後ではないのだろうか？

角山　そうではありません。最近私は、雑誌『大航海』No.11（１９９６年７月）に、「オリエンタリズム再考」を書いておいた。ご覧いただいたらいいが、ここには資料も引用してまとめてある。

木村　不協和音ばかり申し上げておりまし

たので、最後にポジティブな発言をしたい。インドをみていると、最初はインドにくるイギリス人は細君を連れてくることは原則禁止だ。だから、インド人と混じって住む。そして東インド会社のたががゆるむと辺境で半匪賊化して、言うことときかなくなるイギリス人もでてくる。そうすると彼らはどういう風に自分を自己認識するかというと、自分はインドの王だというわけだ。いってみれば、対等というか、混じってしまう。インドで、周囲から区別されたイギリス社会がでてくるのは、細君を呼んでもいい、という方針がでてくる時期と重なっているような気がする。そして支配が固まってくる。おっしゃるとおり、わたしも１８世紀の末という感じだ。

川勝　最初はあこがれの対象。インディアン・クレイズといわれるような熱狂だった。シノワズリが１８世紀。そして１９世紀になるとジャポニズムがでてくる。インド、中国、ジャパンというふうに移っていくが、大転換は１８００年前後にある。シノワズリ、中国趣味あるいは中国へのあこがれは、高谷さんが小中華と書かれているフランスにおいて非常に高かった。フランスは中国の文物をいれる。物は陶磁器・絹織物に代表されるが、中国的な農本主義も農業中心のフランスに大きな影響を与えた。ケネーやテュルゴーの重農主義学派というのは突然でてくるように思うが、あれは、キリスト教化した中国人をつれてきて、中国の農業について聞いて、農業は大事だということになった。ヨーロッパ人の基本的なあこがれの対象はギリシャ・ローマだが、１８世紀末になるとギリシャ・ローマにも追いついてしまった。ということはいいかえるとアラビア世界が持っていたものから吸収すべきものはなくなったということだ。そしてその時に中国の華夷観が入った。文明と野蛮という見方です。それが入ったときヨーロッパは自己を文明と称した。文明という言葉をもっていたが、世界をそういう形で解釈する体系をフランスは持っていなかったと思う。その見方が中国から１８世紀末に入る。そして１９世紀のふたをあけてみると、イギリスではミル、フランスではギゾー、ドイツではヘーゲル、マルクスに続くように一気にアジアは停滞、ということになった。１８００年頃を境に一気に変わる。前にあこがれていたものに対する裏返しの感情が出たわけだ。しかし、そういう文明・野蛮のパラダイム自体も借り物である、というふうに思う。また、時間軸の進歩についても申上げておきたい点がある。普通、進歩というと発展段階論ではいつもヨーロッパが先頭なのだが、進歩に対して退歩もある。だから、彼らヨーロッパ人がギリシャ・ローマを見に行った時感じたのは、ギリシャ・ローマはすでに廃虚でしかな

いということであった。つまり今度は、いかにしてギリシャ・ローマは滅びたのか、あるいはなかんずく、なぜローマ帝国が滅亡したのかという問題に関心が移っていく。自分たちも場合によってはローマのように滅びるかも知れない。あるいはヴェネチアも、かつての栄華はどこにいったのか、という問いである。ラスキンが、ヴェニスにあるのはわれわれの将来の姿だ、あそこは墓場だ、そうなったらどうするのか、と『ヴェニスの石』で問いかけたことに代表されるように、凋落という暗い影がでてくる。そういう感覚が体系化されると、社会は滅びるという見方になってくる。それをもっと体系化していくと、滅ぼそう、というところまできて、マルクスのような見方が生まれてきた。いずれにしても彼らは外からのインパクトをうけていた。他方、東南アジアは中国やインドのものが集まってくる場所だった。東南アジアは中国だけではなく、インドだけでもなく、同時に双方のものをいれている。そこに偉さがあると思う。逆に、金や銀は中国やインドに向けてどんどん出ていくし、本来ならそれを使えばいいんだが、使わない。いらないというか。だからできるだけ無駄なものはない形で生活している。手に入れることができるにもかかわらず、手に入れないというところにすでにそこに選択が働いている。つまり、暮しの立て方が、国際性の中で、しっかり自分たちの生き方を守っている。というか、そのほうが気楽なのである。ヨーロッパと同じものがそこにありながら、プロダクト・コンプレックスの作り方が非常に対照的である。それは最終的にどこから来ているかというと、東南アジアの自然の恵みの豊富さとヨーロッパの自然の恵みの欠落との違いに由来するのであろう。結局、生態史観に戻ってくる。ただ、近代は東南アジアから始まったというのは繰り返し強調しておきたい。

個別な東南アジア

松原　やはり相転移ですね。固体が流体になったようなもんですね。だから、それはやはりある意味では非常に特異な現象である。だから、それを普遍ということで捉えると世界的な誤りが出てくると思う。やはりある種のミューテーションであるし、今日お話を聞いていて、なるほどとその筋道はよくわかった。逆にいえば、東南アジアに焦点をあてると、これは別にミューテーションである必要はないと思う。ただ、歴史の中で東南アジアを位置づけるとすれば、東南アジアの論理とはどういうものか、それをはっきりとさせねばならない。しかし、それがまだ定まっていず、堂々巡りというか、回りをまわっていると思う。それが出てくると、逆にいえばヨーロッ

パの相転移の位相というものがよく判ると思う。また、日本のおかしさというものもよくわかる。中国やインドの世界はおもしろい。私は中国世界というのは相転移がほとんどおこらないところで、これは比喩的な意味で恐竜時代から生きている社会だろうと思う。地球上には原理が違うものが持続的に存続してきている、と私は思う。関係の中で変化しているが、世界中相転移がおこるというものではないだろう。

高谷　どうも皆さんありがとうございました。川勝さんと松原さんが総括をしてくれたので、私は何もすることがないが、もう一度私は東南アジア側から、東南アジアの性格を述べ、同時にひとつお願いを申し上げておきたい。やはりヨーロッパが考えた海と東南アジアが考えた海は違うと思う。ヨーロッパはインド洋にきて豊かな物産をみて「はっこれは」と思ってショックをうけたというが、私からするとヨーロッパはもっと前から外世界に圧倒され続けてきた所だと思う。巨大なるオリエントというのが常に光りつづけていた。それは渡辺さんがいわれたとおりだと思う。ギリシャがペルシャやエジプトをみて驚き、怖れた時からヨーロッパは歴史をつうじて、それと同じような驚きと恐れを持ち続けてきた。そして、いつもコンチキショウとおもっていた。それが１８世紀の末かなんか知りませんが、逆転したのでしょう。そして、そのときに溜飲をさげるがごとくちょっと気違いじみてひどいことをしたと思う。そういう意味でいえば、大西洋やインド洋は溜飲をさげるに足る暴挙をするに適した海だったかも知れないが、東南アジアの海は、そんな海ではなかった。それは商業の海ではなく、生活の海だった。私の言葉でいえば熱帯多雨林多島海の海民の世界だった。熱帯多雨林多島海の海民の世界は他の地域には類を見ないようなものであった。特別な生活のノウハウ、社会、世界観がある。その特性は私たちの力不足のために、もうひとつよく言い表わせていないのだが、とにかくヨーロッパのそれとはおよそ異質なものであり、およそヨーロッパからの侵入者のそれと競合するものではなかった。その特性の一部はすでに述べたように対人主義であるとか、小人口だとか、男の美学だとかである。ここが商業の場であるということ以上に、より密度濃く、熱帯の森と海という特殊な生態に適合した生活の海だということはまちがいがない。さて、こういうことだから、ここで、ヨーロッパの人達に対してひとつお願いしておきたいことがある。それは東南アジアの独自性に鑑み、どうかそっとしておいていただきたい、勝手にやらせていただきたい、ということである。今日も角山先生のお話で東南アジアどうするんだよ、と言っ

ていただいているが、これに対しては「済みませんが、ほっといてください」と言いたいのである。これはうちの海だし、私達は私達流に生きてきたし、これからも私達流に生きて行きたいのだから、と言いたいのである。川勝さんは太平洋地域時代がはじまるとおっしゃるが、とんでもない。そう勝手に決めてしまわないでくれ、俺達は俺達自身の考え方があるのだから、と言いたいのである。堅苦しい言葉でいうと私達東南アジアは私達自身の固有性、固有な論理というものを持っているということである。この点に関しては、松原さんと同じ考えなのです。時間切れになり、最後になりましたので、反論をいただけず言いっぱなしで失礼をするが、そんなふうに感じています。無礼なことばかり申し上げたかと思いますが、お許しください。皆さんからも直截的な発言をいただきおもしろうございました。ありがとうございました。